「おもひ」と「かんがへ」

松浦寿輝（まつうら ひさき）
詩人、小説家、東京大学名誉教授。著書に詩集『冬の本』（高見順賞）、小説『花腐し』（芥川賞）、評論『折口信夫論』（三島由紀夫賞）など多数。

わたしたちは、現代日本語で、「恋人のことを思う（想う）」と言ったり、「来週の旅行の計画を考える」と言ったりする。「思う」と「考える」、二つの漢字から成る熟語が「思考」だが、同じ「思考」でも、感情の籠もった思念を心に漠然と浮かべることが「おもう」、筋道を立てて理知的に頭を働かせることが「かんがえる」――わたしたちは二つの動詞をおおむねそんなふうに使い分けているようだ。幼年期以来の言語生活の諸場面の蓄積から、そうした使い分けを習得し、それに習熟してきたということだ。

ただし、さほど区別せずに混用し、「そう思います」と言ったり「そう考えます」と言ったりもしている。「考えます」の方がいくらか改まった感じになるといったところか。しかし、二つの動詞それぞれの意味領野は正確にはいったいどのようなものなのか、両者はどのように食い違い、またどのように重なるのか。そんな疑問がふと湧くこともないではない。そういうときこそ古語辞典の出番である。

「おもふ」について、「オモ（面）オフ（覆）の約」と説明している辞典がある。胸のうちに様々な感情を抱いているが、「おもて」（オモ（面）テ（方向）であり、そこからオモテ（表）の意味にもなる）には出さず、じっと蓄えているというのが原義である、と。共同体の公共の場面には露出しがたい、顔（オモ）の裏に（裏面に）「覆われた」感情――それが「おもひ」なのである。

では、「かんがふ」はどうか。元来は「かむがふ」、さらに遡れば「かむかふ」なのだという。カはアリカ、スミカのカ、すなわち「所」「点」で、ムカフは両者を向き合わせるの意。「かんがふ」とは、二つの物事を突き合わせ、その合否を調べ、ただすことなのだ。

語源の探索は、客観的に実証されうる場合と推量や想像によるしかない場合とがある。「おもふ」「かんがふ」の以上のような語源説明がそのどちらであるのか、国語学の専門家でもないわたしは詳らかにしない。ひょっとしたら、辞典の項目執筆者にはまことに失礼ながら、まったくの憶測、当て推量、こじつけに近い語源説なのかもしれない。が、たとえそうであるにせよ、「おもふ」なら「おもふ」、「かんがふ」なら「かんがふ」というきわめて基本的な語彙が、長い歳月をくぐり抜ける中で蒙ってきた変容の過程に、ふと「おもひ」を致させてくれる、それをめぐって何がしか「かんがへ」をめぐらすきっかけを与えてくれるという意味で、ときにこうした記述を参照してみるのはきわめて刺激的かつ有用な振る舞いだろう。自分が日常何げなく用いている単純な言葉のうちに、民族の歴史の膨大な時間が孕まれていることを気づかせてくれるからだ。単に古典を理解するための補助ツールというにとどまらない古語辞典の愉しみが、そんなところにもある。

結局、本来はまったく意味を異にする二語だったということだ。「おもひ」とはもともとは内に秘め隠された思いのことであり、だとすれば「何々と思います」などと今日わたしたちがおおっぴらに口にするのは、原義とは完全に矛盾した言葉の使いかたということになる。それは顔の表情に表われないように抑制しつつ、心のうちにじっと堪えている不安、怨恨、執念、恋情など、何かしら激しい情動を孕んだ思念であった。他方、「かんがふ」とは、二つの物事を対峙させ、比較考量するというきわめて厳格な知性の働きを意味していた。その働きが窮まるところ、調べただし、罰を与えるという意味を帯びるまでになったという。

一方は抑圧と内向、他方は判断の厳正と公共性――相異なる強い意味をそれぞれうちに蔵した二つの動詞だったのだが、千年を超える歳月の経過の中で、そのニュアンスの突出部分が磨り減り、意味作用の磁場が徐々に接近し、重なり合うようにもなっていった。冒頭に述べたように、「思う」と「考える」の使い分けの感覚は今日まで生き延びているものの、それはかなり漠とした曖昧な印象にすぎず、原義にあったようなくっきりとした差異がわたしたちの意識にのぼることはもはやない。しかし、それをつぶさに知れば、言葉が湛えている歴史の時間の厚みと重みに今さらのように目を開かされずにいまい。かくして、小倉百人一首に採られている権中納言敦忠の歌「逢ひ見てののちの心にくらぶれば昔はものを思はざりけり」に秘められた情念の激しさに、改めて心を深く動かされることにもなるのである。

午後四時半

小池昌代（こいけ まさよ）
一九五九年生まれ。詩人・作家。主な作品に『もっとも官能的な部屋』『ババ、ババサラ、サラバ』『コルカタ』『タタド』『ことば汁』『たまもの』など。

ここ数年、「百人一首」に取り組んでいた。和歌を現代語に訳し解説を施す。先人の残した研究書を頼りに、古人が何をどのように見たのか、その視線の在りかを探っていく。

現代語になおすに際し、「歌意」でなく「詩」として読めるように試みた。悪戦苦闘のあがきである。和歌の凝縮力には凄いものがある。原歌には並ぶことすらできない。それでも「詩」という一点の共通項をにぎりしめ、古語と現代語の間を行き来する。同じ日本語でも、異言語の翻訳と感触は変わらない。

夕されば　門田の稲葉　おとづれて
　　芦のまろやに　秋風ぞ吹く

たとえばこの大納言経信さんの歌は、次のような八行に。

ゆうぐれになれば
風がたつ
門前の
一面の
稲の穂波が揺れている
風はここ
蘆の小屋にも吹き渡ってきて
秋の音

冒頭の「夕されば」。なんて綺麗な言葉だろうと思う。夕方が去るってこと？　いいえイメージでは逆。夕方が来る。「ゆふさる」の已然形に格助詞「ば」がついて、「夕方になれば」の意味になる。

ちなみに名詞形は「ゆふさり」。「ゆふさりつかた」とあれば、夕方のころという意味になる。これ、みんな、辞書に書いてある（『大修館　全訳古語辞典』）。

ただ、「さる」という言葉の感じがまだつかめない。「さる」がなぜ、「来る」になるのだろう。古語はわたしにとって外国語に近い。今度は辞書で「さる」をひく。すると、やはり、「近づく」と「来る」が出てくる。その先には、こんな記述も見つけた。

「もともと『さる』は、その場所を離れて時間的・空間的に進行する・移動する、の意。だから…（略）…来る、の意にも用いられる」。

現代語では、「ここから去る」というように、ある基準点から遠ざかることを言う場合が多い。だが古語では、「ゆふさる」のように、来る、近づく、の意味で使うこともあるのだ。遠ざかるだけでなく、近づく場合も含む。古語のほうが、範囲が広い。いやもうこれは、懐が深いといったほうがいいだろう。古語に触れると、指先が温まってくる。

さらに「さる」を探検する。すると自動詞と他動詞があることがわかる。「ゆふされば」の「さる」は自動詞。こちらの意志や気持ちに関係なく、自然に行ったり来たりするというのが本来の意味だとわかる。だんだんと「夕されば」がほぐれていく。こんなふうに、ことばを「灯り」として、いや、ことばのわからなさこそを「灯り」として、いや、それを知りたいという思いを「灯り」として、辞書の森を進んでいく。

顔をあげると、「ゆうがた」が来ている。ゆふさる ― さる ― Sa-ru　という音のなかに、ゆうがたがすっと動いた音がする。わたしはうれしくなる。風も動いた。目の前に門前の田んぼ。揺れる穂波が見えてくる。粗末な芦の小屋が見えてくる。千年前の京都・梅津。わたしはそこを吹き渡る風だ。

風となって、場所を「おとづる」。おとづるのなかの「おと」が気になる。これ、音では？　ふとそう思ってみたび辞書を繰る。

「訪問する、便りをする、声をたてる、音をたてる」。やっぱり出てきた。「おとづれは、音連れの意」とも。現代語の「訪れる」は無色透明、機能だけが見える動詞だけれど、もともとは音を連れて、誰かの元へ行くことだったんだ。

この日、師賢朝臣（源師賢）の京都郊外の山荘に、人々が集い歌を詠んだ。テーマは「田家秋風」。一面、黄金に輝く稲穂。遠くにぽつんと小さな茅葺きの家。夕方の風が涼しさを運んでくる。午後四時半。あたりは静かである。聞こえるのは風の音のみ。まだ誰も声をあげない。手元の紙に筆が走る。歌がかすかに動き出している。

物語解釈の心強い助っ人

大塚（おおつか）ひかり
一九六一年生まれ。古典エッセイスト。著書に『源氏物語』（全訳六巻（ちくま文庫）など多数。近刊に『本当はひどかった昔の日本』（新潮文庫）など。

はじめて古語辞典を買ったのは一九七五年。中学三年生の時だ。以来、四十一年間、数社の古語辞典を愛用している。ことに『源氏物語』の現代語訳をした時はフル活用した。

訳に迷う時、第一に前後の文脈で判断する。

第二に敬語や謙譲語で判断する。

たいていはこのあたりで解決するのだが、それでもダメな時は第三に文法で判断する。この時、古語辞典の出番となる。

たとえば「紅葉賀」巻に、主人公の源氏と藤壺の歌のやり取りがある。

〝よそへつつ見るに心は慰まで露けさまさるなでしこの花〟

周知のように、源氏は父帝の愛妃・藤壺を犯し、藤壺は不義の子（のちの冷泉帝）を生む。その若宮がはじめて宮中に参内したのを前にした源氏は、愛らしい我が子に心乱れる思いで退出、常夏の花（撫子の異名）に添えてこの歌を藤壺に送る。「撫子の花……若宮をあなたになぞらえ、心を慰めようと思っていたのに、かえって花の露にもまして涙がこぼれるばかり」と。

それに対して藤壺はこう返歌する。

〝袖ぬるる露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬやまとなでしこ〟

この歌が問題で、〝うとまれぬ〟の解釈しだいでは正反対の意味になってしまう。

〝ぬ〟を打消ととれば、

「あなたの袖を濡らす露のゆかり、あなたの子であると思うと、やはりうとめない大和撫子……若宮です」

一方、完了ととれば、

「あなたの袖を濡らす露のゆかり、あなたの子であると思うと、やはりうとましくなってしまう大和撫子……若宮です」

実のところ〝ぬ〟は曲者で、複数の古語辞典で大きくスペースをとって解説してある。大修館の『全訳古語辞典』で調べると「完了の助動詞」とあるが、「打消の助動詞『ず』の連用形『ぬ』ともしばしば混同されやすい」とあって、まさにこの歌のケースに当てはまる。ただし、「完了の『に』『ぬ』は、活用する語の連用形に付くことで見分けられる」ともある。打消の〝ぬ〟のほうは未然形に付くので、そこで判断すればいいわけだ。

で、藤壺の歌の〝うとまれぬ〟を分析すると……〝うとまれぬ〟の〝うとま〟は〝うとむ〟の未然形。肝心の〝ぬ〟の直前の〝れ〟は自発の助動詞〝る〟の活用形だが、未然形・連用形ともに〝れ〟なのである。

つまりこの歌の場合、打消でも完了でも、同じ〝うとまれぬ〟となって、文法上でも意味の判断がしかねる。ということが、古語辞典を調べて改めて確認できる。

そんなわけでこの箇所は、古註以来、打消と完了の両説があるが、私は完了説をとった。打消なら〝うとまれざる〟となるのが普通だろうし、藤壺の歌の〝ぬ〟を打消ととる人は、母親が実の我が子をうとむわけがないという先入観も手伝っているのではないかと思えた。『うつほ物語』の男主人公の妻は、我が子のおしっこが汚いからと世話もしない。それが皇女である彼女の高貴さを示す特徴として描かれている。平安文学の解釈に現代人の価値観を持ち込むのは禁物なのだ。

古語辞典は、官職名を調べる時も役立った。

『源氏物語』には、主人公の源氏はもちろん、登場人物の本名はほとんど出てこない。頻出するのは官職名で、男なら太政大臣、左右大臣、内大臣はじめ、按察大納言、兵部卿宮、頭中将、宰相、大内記等々、数え切れないほど出てくる。

そのいちいちに対応する位階、上下関係、所属部署があり、官職自体のイメージがある。高貴な人は、晩年の源氏が六条院と呼ばれたり、天皇妃が藤壺や弘徽殿といった宮中の殿舎名で呼ばれるなど、住まいの名でも呼ばれ、その住まいにもまた意味がある。

『全訳古語辞典』によれば、弘徽殿は「清涼殿の北にあり、皇后・中宮・女御などが住んだ」、淑景舎（桐壺）は「東北の隅にあった殿舎で、女御・更衣などが住んだ」。ミカドのおわす清涼殿近くの弘徽殿が有力妃のいる殿舎なのに対し、桐壺は後宮の片隅にあることが分かる。

源氏の母桐壺更衣が権門出身の弘徽殿女御（のち大后）に憎まれ衰弱するという物語の構図が、古語辞典を紐解くと見えてくる。

古語辞典は物語の解釈を助けてくれる心強い助っ人なのだ。

【特集】古語辞典、使っていますか?

生徒が「古文好き」になる古語辞典をめざして

安藤千鶴子（あんどう ちづこ）
『新全訳古語辞典』編者
元都立小山台高等学校教諭

七割以上の高校生が古文が好きではない、という調*査結果があることを聞きました。そのような状況が、いまの普通の状態としてあるのなら、そんな古文嫌いと言われる生徒たちに向けて、学習古語辞典がなすべきことがあるのではないか。生徒たちの苦手意識を少しでも軽くし、古文学習へのわかりやすい入り口を用意する、それが今の学習古語辞典に求められているのかもしれません。

私どもでは、故・林巨樹先生を中心に、『古語林』『大修館全訳古語辞典』を刊行してまいりましたが、このたび、これらの辞典を踏まえつつ、新しい、今の時代の生徒に向けた『新全訳古語辞典』を刊行することとなりました。古語を、「わかった」気にさせる。それによって、まずは古文への入り口を突破させる。今回の『新全訳古語』はそこに重点を置いて編集されています。詳細は、この雑誌の別のページで説明されるということなので、ここでは二つだけ申し上げます。

古文のかなめで、そして生徒がつまずきやすいところは、助詞・助動詞、そして敬語でしょう。いくつかある助動詞、たとえば推量の助動詞のそれぞれの違いを理解して、しっかり訳せること。大変なことですが、それができると、古文が「わかった」と生徒も実感します。『新全訳古語』では、重要な助詞・助動詞は特別にページを大きくとって、ゆったりしたレイアウトで見やすく示しました。敬語も、重要な二十語を、やはり特別のレイアウトにして図も使って整理しています。いくつもある助詞助動詞や敬語の意味・用法を、頭から文字でひたすら追っていくのは、生徒にとって苦痛なはず。一目で全体がわかる表組みなら、自分が必要な情報にたどり着くのも、大きな負担を感じずにできると思います。

もう一つは、コラム。古典の理解に役立ついろいろな話題をこれまでもコラムにまとめてきたのですが、『古語林』や『大修館全訳古語辞典』では、それらは別々のページにちらばっていました。けれど、それではなかなか生徒も読まないし、まとまっていた方がご指導の際には使いやすいとうかがい、『新全訳古語』では一か所にまとめました。それも、「東海道五十三次」の宿場をイラストで紹介しながら、五十三のコラムを読むという仕立てで、読んだところからチェックを入れる東海道の地図を付けています。なんとか生徒に興味をもってもらって、ともかく中身を読んでもらえたら、ということでこんな工夫もしました。

私たちは、古語の世界に入るまでの「わかりやすさ」を大切にしたいと思っています。一つ一つのことばに即して、訳す。一つ一つのことばの意味を意識させる。そのために、辞書でわかりやすい見せ方、説明を工夫し、一つ一つの言葉に着目させる。『新全訳古語』で少しでもそれができているなら、「古文嫌い」の生徒の手助けができるかもしれません。

もう二十年以上も前になりますが、ご近所さんたちから請われ、『源氏物語』を読む会を、月に二回ほどのペースで続けてきました。十四、五人の生徒さんたちが集まって、『源氏』のはじめから読み進め、無事に最後まで読み終え、今は、『平家物語』を最初から読んでいます。特に古典を勉強してきたわけでもない人たちが二十年以上も続けられたというのは、試験がないから、ということもあるかもしれませんが（笑）、やはり古典文学のもつおもしろさ、古文の力だと強く感じます。高校生たちが古文への苦手意識をなくして、その楽しい古典の世界に入れるように願うばかりです。

（二〇一六年九月談、聞き手・編集部）

*平成一七年度高等学校教育課程実施状況調査より。

【特集】古語辞典、使っていますか?

名脇役として「古語辞典」を活用する

林（はやし） 伸樹（のぶき）
『新全訳古語辞典』編集委員
神奈川大学附属中・高等学校教諭

1　電子辞書と書籍版辞書

私の勤務校では中学校入学時に、いわゆる書籍版の国語辞典、英和（和英）辞典の購入をすすめている。（特定書目の指定はしない。）次の段階として、中学三年生進級時に、外国語（英語）科の主導で電子辞書の購入をすすめている。その際、問われれば、古語辞典が収録されている機種をすすめることはある。一方ではここで書籍型の古語辞典の購入をすすめる努力もしているが、なかなかそのようにはならないのが実際のところである。

そこで、一つの工夫をしてみた。勤務校は中高六年一貫教育を行っている。六年間を二年ずつ三つのブロックにわけて教育活動を展開しており、三階建て校舎の各階に各ブロックのＨＲ教室と学級担任室が配されており、学級担任室は各ブロックの教育ステーション的な役割を果たしている。第二ブロック最初の学年である中学三年生からは、古典の授業も本格化していくことから、この担任室に、一学級の生徒が同時に使える数の古語辞典を備えた。『大修館　全訳古語辞典』（以下『全訳古語辞典』）を中心に、一方であえて複数種の辞書を同時に使えるようにもした。日常的に単語の意味を調べるには、電子辞書に頼るというのが実態である。電子辞書は短時間で目的の単語に到達することが可能であり、当座の用はそれで足りる。しかし、その語が読解に際してどの程度の重要度があるか、あるいは同じ語で始まる単語はどれくらい、どのようなものがあるのか、などということに注目させたい場合は書籍版でなくてはならない。私は高校三年生を担当することが多いが、先年中学三年生の春季講習を担当した。高校入試を体験しない勤務校の生徒に、進学校といわれる私立高校ではどんな入試問題が出されているのかを体験させる内容であった。ちょうど一学級ぐらいの人数だったので、担任室備え付けの古語辞典から二種類の辞書を用いて、まず『全訳古語辞典』で、いわゆる「看板」（重要用例）の付いている語について実際に辞書をひかせ、用例などを含めこまかく読ませたり、異なる辞書でも語の重要度の位置づけが同じであることなどを印象づけたりするように試みた。また、例えば「こころうし」が問題文中に出てきたときに、辞書をひかせ、「こころ」で始まる単語、特に形容詞がどれくらいあるのかを確認させてみた。このような試みを通して、単語の意味・用法の習得において、電子辞書では体験しづらいこともあることを伝え、上級学年進学時には、必要に応じて書籍版に移行することをすすめた。

2　「古語辞典」を超えた「古語辞典」を

ところで、書籍版「古語辞典」の旗色が今ひとつよくない理由としては「電子版」の存在以外にも理由があるように思われる。

多くの学校では、教科書以外に何点かの副（補助）教材を採用しているのではないだろうか。勤務校では高校の国語（古典）で、「国語図説（便覧）」「古典文法」「古文単語集」「漢文句法」を採用している。学校によっては、さらにいくつかの教材が加わるのかもしれない。生徒にとって、「古語辞典」に加えてこれだけの教材を使いこなすことはなかなか大変なことである。

「古典文法」などについて古語辞典で学ぶことは可能である。しかし、「古語辞典」の「本職」は「古典語」の意味・用法・位相を学ぶことにあるので、どうしてもその他の内容をまとめて、細かく、整理して、美しく（図説などの写真）捉えようとすると、それぞれの副（補助）教材に手を伸ばすことになってしまうようである。

大修館書店では、一九九七年に『古語林』を刊行し、さらに、二〇〇一年には『全訳古語辞典』を刊行した。『全訳古語辞典』の編集の中心にいらっしゃった安藤千鶴子先生は、『国語教室・第96号』（二〇一二年一〇月）に寄せられた「（これ一冊で）古典と仲好くなれる辞書を」のなかで、『全訳古語辞典』の特徴として、「文法のテキストを辞書の中に組みこんだこと」を挙げられている。まさに副（補助）教材「古典文法」の役割も果たせる「古語辞典」の誕生である。また、書名にもある通り「すべての文

例にていねいな現代語訳（逐語訳）をつける」こと、また『古語林』から継続して掲載された「名歌・名句解説、古語ウォッチング（古典に親しむための軽妙な読み物コラム。好評）、人物・事項に関する簡明な事典など、古語学習の助けになる多くの工夫を加えた」ことなどを『全訳古語辞典』の特色とされている。

今般、『全訳古語辞典』の成果を基に、『新全訳古語辞典』が刊行されることとなり、縁あって編集のお手伝いをすることになった。『新全訳古語辞典』では、『全訳古語辞典』で行われた新たな試みを、さらに現代の古典学習に寄与するようにいくつかの工夫が加えられた。以下、それらの工夫のいくつかを紹介しながら、『新全訳古語辞典』を用いることで、どのような授業が展開できるかについても述べさせていただくことにしたい。

古典語を理解するために

まず、古語辞典の「本職」であるところの、「本編」、単語の理解について。

生徒が古典語理解において苦労するのは、もちろん現代語にない語彙の理解が第一である。しかし、それと同じくらい苦労する点として以下の三点が挙げられる。

(1)現代語と古典語の間で形は似ているが、使われる意味が異なっている語がある。

(2)特に形容詞・形容動詞について、一つの現代語に対して、複数の古典語があてはまる。

(3)同じく形容詞・形容動詞で、「よい意味」「悪い意味」のどちらを表す語なのかわかりにくいものがある。

そこで『新全訳古語辞典』では、重要語について次のような工夫を施した。(1)については、該当する語に「古今異義」のアイコンをつけて示した（図2）。また(2)についてはコラム「まとめて覚える！」として示した（図1）。(3)に該当する語については、それぞれの語釈に「＋（＝よい）」・「－（＝悪い）」・「＋－（＝どちらにも）」の記号をつけた（図2）。形容詞・形容動詞は、細かい訳語はともかく、「よい意味」「悪い意味」のどちらか、あるいは「よい」「悪い」どちらにも用いられることがあるのかということがわかると、おおよその読解に役立つと考えたためである。

これらを用いた授業展開としては、読解する文中に、例えば(1)の例にあてはまる語が出てきた場合に、「同じような例を知っているか」という発問をし、挙げられた単語について『新全訳古語辞典』で確認していく方法などが考えられる。また(2)(3)に関しては、「めざまし」「あてなり」などが出てきた場合に、『新全訳古語辞典』の掲載ページを紹介する。この辞典を所持していない生徒に対しては所持している生徒の『新全訳古語辞典』を参照させたり、概要を板書したり、可能ならばプロジェクターで投影したりして、知識を豊かにさせたい。

本編についてもう一つ、「用例」に関して触れておきたい。教科書所収のものがある用例については、なるべくそれを採用し、かつ、教科書に出てくる用例であることを示すアイコン（📖）をつけた。以前の経験では、授業の場面で用例は教科書にあることを指摘すると、生徒はその語の重要性を実感したように思われた。

図1

図2

古典文法を理解するために

次に文法事項、特に助動詞・助詞、及び敬語表現についての工夫について。

助動詞・助詞に関しては、すでに前身の『全訳古語辞典』において十分なものが囲み記事として掲載されているが、今回は、カラー化がさらに推進されたことも利用し、簡明な表形式を多く採用するなどして、視覚に訴え、理解を助ける努力がなされている(図3)。特に敬語表現については、敬意の関係の理解を助けるような図解化が試みられている(図4)。

和歌・俳句を理解するために

次に、和歌、特に『小倉百人一首』の扱いについて述べる。

『全訳古語辞典』では、『小倉百人一首』所収歌をはじめとする「名歌」「名句」は、五十音配列によって、本編の中に項目として立てられていた。今回、『新全訳古語辞典』では、付録の一つとして「名歌名句事典」を設け、本編の「こ」と「さ」の間にまとめて掲載した。なかでも百人一首については、「百人一首事典」として多くの紙幅をあてている(図5)。各歌には、内容を端的に表すキャッチコピーをつけ、用いられている修辞技法や作者の性別などが一目でわかるようアイコン表示を行った。さらに訳・鑑賞・表現の項目を立て解説し、理解を深める工夫をした。さらに、「百人一首事典」の各ページには、藤原定家・式子内親王を「案内人」として、『小倉百人一首』にまつわる様々な情報を満載したコラムが掲載されている。『小倉百人一首』以外にも和歌二三九首、俳句一五三句を掲載し、訳と解説を加えた。また、各種の索引を掲載し、検索の便宜が図られている。古典文学の理解において、世界観、人間観、自然観などを学ぶことができるのは和歌を初めとした韻文に依るところが大きいと言える。今回『新全訳古語辞典』において、多くの和歌・俳句を同時に通観できるのは、まさに書籍版古語辞典の強みであり、授業現場において、語彙上・文法上・古典理解上の豊富な用例集として活用されることを期待したい。

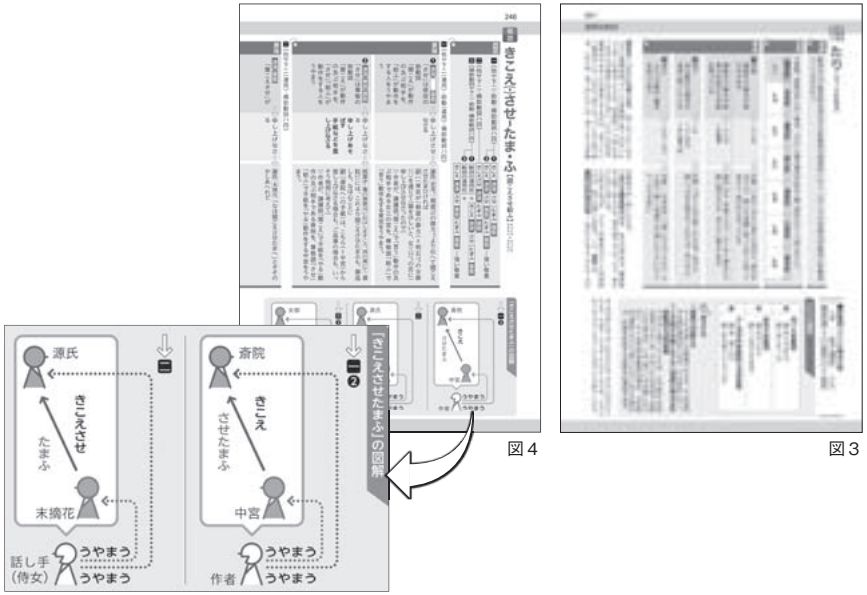


図4

図3

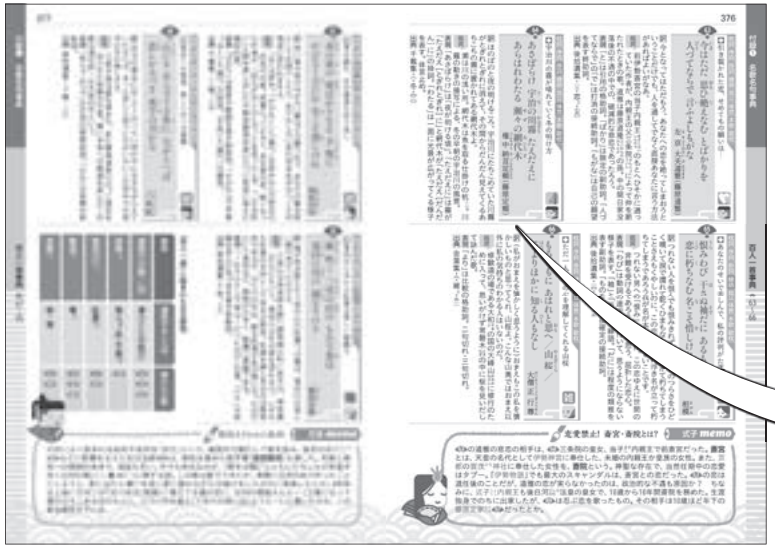
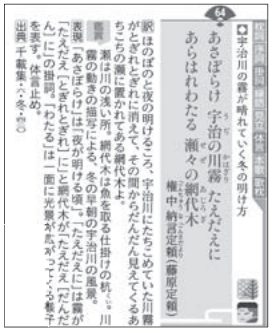


図5



「ウォッチング」改め「ウォーキング」

最後に、『古語林』『全訳古語辞典』を通し、好評を博していた「古語ウォッチング」についてふれておきたい。古典理解のための多方面の知識や資料を紹介する「古語ウォッチング」は、役に立つ内容をもちながら、コラムとして本編の随所に配置されていたため、その全てに目を通すことはなかなか難しかった。そこで『新全訳古語辞典』では、「名歌名句事典」と同じく、一カ所にまとめるようにした。

図6

タイトルも「弥次喜多と歩く古語ウォーキング事典」と改め、東海道五十三次になぞらえ五十三項目に編集し、「古典の読み方」「古典の背景」「古語の意味」「古語の仕組み」という四つのジャンルに分けて掲載した（図6）。「読み」「理解」を深めるために興味深く、重要な項目ばかりである。授業の場面では、学習する作品に沿って紹介するのが一般的な用いられ方かもしれない。さらに一歩進んで、書かれている内容について、さらに深く調べて発表し合ったり、内容から、古典の世界、そこに生きる人々について意見を交わしたりなどといった「アクティブ・ラーニング」の素材として採用することなども考えられるのではないだろうか。

以上、過去の実践体験を通して、『新全訳古語辞典』の新たな特色を紹介しつつ、この新しい辞書が授業の場面でどのように役立てられるかについて述べてみた。様々のアイコンの採用など、他にもまだ多くの特色が盛り込まれている。

古典理解において、「主役」は作品である。その作品を理解していくために、「脇役」であるさまざまの副（補助）教材を用いて理解を深めていくことはもちろん大切である。しかしどれか一つ、ということであれば、ぜひ一度この『新全訳古語辞典』を「脇役」に採用していただきたい。そして、この辞書をすみからすみまで活用していただきたいと願う。

国語科なんでもQ&A

Q これからの古典の授業の方向性は？

次期学習指導要領の検討が進んでいますが、これまで一年生の必履修科目の「国語総合」が「現代の国語（仮称）」と「言語文化（仮称）」と変わり、授業内容も変化が求められています。また、アクティブ・ラーニングの導入による教材の扱い方や授業形態など、古典の学習はどのように変わるのでしょうか。

徳島県・30才女性

A

西（にし） 一夫（かずお）
信州大学教授

現行の学習指導要領で設けられた「伝統的な言語文化」を軸にして古典の多様な学習が目指されてきました。また、小学校から系統的に古典関連の教材を取り上げることで、教材化や課題の見直しがなされました。このような方向性は、次期学習指導要領の科目編成にも見られ、必履修科目の一つである「言語文化（仮称）」は「上代（万葉集の歌が詠まれた時代）から近現代につながる我が国の言語文化への理解を深める科目」（「審議のまとめ」）と位置づけられ、古典領域に特化するのではなく、古典と現代文とを融合した教材や単元等が想定されるでしょう。

このような科目を支える活動としてアクティブ・ラーニング（AL）が注目されています。ALは言語活動の充実と言語能力育成の観点から重視されています。ALによる授業改善を考える際には「深い学び・対話的な学び・主体的な学び」の三つの視点が大切です。ALと聞いて想起しがちなのは「対話的な学び」ですが、残りの視点も現在の学習活動において、ある程度の成果が期待できるのではないでしょうか。例えば課題解決学習として「古典作品の夢について調べる」という課題などは、さまざまな作品に接することができ、図書室活用の観点からも有効です。辞書や索引、情報機器等を活用して「夢」の用例を集め、「明るい・暗い」「具象的・抽象的」等の観点で分類・整理して特色を明らかにして、その成果を報告（レポート・口頭・ポスター等）する言語活動は、「知識・技能」と「思考力・判断力・表現力」とを活用した学習です。また、「今昔物語集」と夢枕獏「陰陽師」とを並記した教材（大修館書店『新編古典B』古典B313）では後者で補われた内容を原文と照らし合わせて読み進めることで作品理解を深めたり、表現の工夫を理解したりする学習となるでしょう。

このコーナーでは、国語科にまつわる疑問・質問に、大修館の教科書編集委員が親身にお答えしていきます。ご質問は小社「国語教室Q&A係」まで。

『新全訳古語辞典』で古典学習のお悩み解決！

『新全訳古語辞典』には、古語への苦手意識をとりのぞき、古語辞典や古典学習にまつわる生徒たちの疑問・お悩みを解決する工夫が満載。『新全訳』の各所に登場する案内人たちが、それらの工夫の数々を紹介します。

Q わからない古語を辞書で引いても、意味を調べるだけで終わってしまい、なかなか覚えられません。

A 古語は、やみくもに意味だけ暗記するよりも、語のニュアンスをつかみ、文脈の中で覚えると、より効果的で、さまざまな場面への応用もききます。そのため、約300語の最重要語には、冒頭に**「これで覚える！」**のコーナーを設置。その語の中心的な意味・ニュアンスや覚えるべきポイントを端的に解説し、教科書によく出てくる代表的な用例とセットで確実に覚えられます。覚えたものはチェックできるように、**チェックボックス**も付けました。**→中面特色1**

Q 古語を調べても、意味がたくさんあって、自分の探している意味がどれに当てはまるのか判断できないのですが……。

A 『新全訳』の用例は**教科書によく出てくる用例**を中心に採用。教科書用例には📖マークを付けて、一目でわかるように工夫しています。**出典名**も、用例の先頭に色で囲んで目立つ表示にしたので、例えば『源氏物語』桐壺巻の用例を探したい」というときにも、探している例を素早く見つけ出すことができるようになりました。また、意味の見分け方や訳すときのポイントなども、**「ポイント」**などで適宜解説しているので、学習をさらに深めることができます。**→中面特色1**

Q 古語辞典は古語を調べるためだけのもので、どれも似たようなものではないですか？ほかに何か違いがあるのでしょうか。

A 『新全訳』は古語辞典としての定評ある確かな解説はそのままに、それに加えて
①重要語を効率的に覚えられる**単語集**としての機能
②助詞・助動詞や敬語を囲みで詳しく解説した**文法書**としての機能
③和歌の世界を深く学べる**和歌事典**の機能
④古典常識や資料をわかりやすくまとめた**国語便覧**の機能
⑤文学史の展開や要点がわかる**文学史テキスト**の機能
を見やすくわかりやすい形で盛り込んだ、**オールインワン型**の今までにない古語辞典です。

Q 古語はなじみがなく、そもそもその言葉がどんな分野の言葉なのか、想像もつかないので、興味もなかなかわきません。

A たしかに、脈絡のわからないものをひたすら暗記するのは、なかなか大変なものです。『新全訳』では、最重要語・重要語のうち、**覚えておくべき古典常識語や季語**などに、その語の特徴や季節が一目でわかる**アイコン**を付けました。視覚的に語のイメージが把握できるので、意味も覚えやすくなります。季語についても、例えば「朝顔」や「七夕」に付いた「秋」のアイコンは、直感的に生徒の違和感を刺激し、古典学習が深まる入口になるでしょう。ほかに**「古今異義」「掛詞」**などのアイコンも表示しています。**→中面特色2**

Q 敬語、特に「二重敬語」「二方面の敬語」や、それらが合わさった表現など、説明を聞いても複雑すぎて頭がパンクしそうです。

A 重要敬語は囲みにして詳しく解説。尊敬語は赤、謙譲語は黒、のラベルを使って用法を一覧した**「見取図」**は画期的。例えば「奉る」のように尊敬・謙譲と複数の用法がある語や、二重敬語・二方面の敬語など複雑な敬語も、その構造が視覚的に一目で理解できます。敬意の仕組みを用例に即してわかりやすく解きほぐした**「図解」**も豊富に掲載しました。**→中面特色4**

Q 助動詞や助詞は、数が多くて覚えるのが大変です。

A 重要助動詞・助詞は囲みにして詳しく解説。覚えるべきポイントである**「接続」「活用」「意味」**の3大ポイントに加え、よく問われる重要な**「識別」**もわかりやすい表にまとめました。さらに学習を深めるには、やみくもな暗記よりも背景にある理屈を知ることが効果的。従来から「文法書いらず」と高い評価をいただいている大修館の古語辞典の**詳しく確かな解説**は、『新全訳』でももちろん踏襲されています。**→中面特色3**

【案内人紹介】

藤原定家と**式子内親王**。付録①「名歌名句事典」で、和歌解釈のポイントや百人一首の背景世界を案内する。

弥次郎兵衛と**喜多八**。付録②「古語ウォーキング事典」で、古典常識と東海道に残る古典の舞台を案内する。

清少納言と**兼好法師**。付録③「古典文学事典」で、文学史の展開や各時代の特色、主な人物関係を案内する。

Q 和歌がとにかくわかりません。

A 『新全訳』では和歌を深く知るための**「名歌名句事典」**をまとめて収録しました。韻文学の展開図や、句切れ・修辞など実践的な解釈のポイントを解説するコーナーも設置。特に**百人一首**はアイコン表示も取り入れて詳しく解説し、和歌の背景や当時の文化を知るためのコラムも全ページに掲載しています。→**中面特色5**

Q 文学史テキストの出題範囲をテスト前に必死に暗記するのですが、テストが終わるときれいに忘れてしまいます。

A 『新全訳』は巻末に**「古典文学事典」**として百科項目をまとめ、辞典本文と同じく、語の特徴が一目でわかるアイコン表示も豊富に盛り込みました。有名な歌人や歌枕から「名歌名句事典」にジャンプできる、一冊を有機的に使いこなすための仕掛けも搭載。さらに、「木を見て森を見ず」になりがちだった従来の文学史学習から脱却し、常に文学史の「森」全体を見わたせるように、古典文学の展開図や主要人物関係図などの使える資料も収録しました。→**中面特色7**

Q 辞書で言葉の意味を調べてもうまく訳せなかったり、訳してみても「結局どういうことなのか」がよくわからなかったりします。

A 古文解釈の実践的テクニック、古文を深く理解するために必要な古典常識や文法の知識についてのコラムは、従来の古語辞典では本文内に散らばり、「たまたま見つけて、ついでに読むもの」になってしまっていました。『新全訳』では、東海道五十三次の宿場順に53のコラムをジャンルごとに並べ、進んで読みたくなる**「古語ウォーキング事典」**として一箇所にまとめました。自分のペースで一歩一歩古語の街道を進み、街道制覇と古典学習完成の達成感も味わえる仕掛けです。→**中面特色6**

Q 辞典は字が小さいし、重いし、持ち運びが面倒です。

A 『新全訳』はデザインや装丁も今までの古語辞典の枠にとらわれず、一新しました。**白い用紙**に、明朝体よりも大きめに見えて読みやすい**ゴシック体の本文書体**を採用。持ち運びも苦にならない**ハンディな製本**に、いつも手元に置いておきたくなるような**スタイリッシュな装丁**は、従来の古語辞典のイメージを覆すはずです。

読んできた本、読んでほしい本 ⑩

妹尾 樹代子（せのお きよこ）
岡山県倉敷高等学校

本コーナーでは、毎回、全国のさまざまな先生方よりオススメの本をご紹介いただきます。

■教科書で素敵な出会いを

「ずーっとずっとだいすきだよ」。この言葉は、私が小学校一年生の時に教科書に掲載されていた『ずーっとずっとだいすきだよ』という話で、主人公の少年が愛犬エルフィーにいつも伝えていたものである。当時両祖父母の家には犬や猫が飼われていて、動物好きであった私はこの言葉を気に入って、彼らにいつも伝えるようになり、ますます動物が好きになった。愛するものに対して「すき」と言えること、そして「ずーっとずっとだいすき」と伝えられること、この当たり前のようでなかなか表現できないことを、小さい頃から学んだことは、私の人生を変えたと思う。読書好きの両親の影響で、私の周りにはいつも本があり、動物が登場するものも多くあった。小学校一年生の時に初めて教科書というものを手にした。学習するより前に挿絵の犬を見て、内容が知りたくなりワクワクして読み、『ずーっとずっとだいすきだよ』で素敵な出会いをした。そしてその出会いが私を国語好きにさせてくれたと思う。国語の教員を目指した時に、改めてこの絵本を購入し、教員になった今でも手元に置いてある。

教壇に立ちながら思う。生徒たちは、これまでに国語の授業で素敵な出会いはあったのだろうか、高校で出会った作品をぜひとも覚えていて欲しい、読書の素晴らしさを少しでも伝えたい、と。現代文と古典を指導しているクラスで、中島敦『山月記』と李景亮『人虎伝』を扱い、両作品を比較する授業を行った。授業で取り上げるにあたり、教材準備は予想以上に大変であり、漢文調なので受け入れられないのではと心配もあった。しかし、時代を越えて読み継がれる小説、文章の流麗さを伝えたかったのである。『人虎伝』と『山月記』は結びが大きく異なっている。何故中島は書かなかったのか、必要ないと思ったのか……。生徒に後日譚があることを伝えると、興味を示したので、ラストシーンを自由に考えさせた。そして、『人虎伝』を披露する。納得する者、興ざめしてしまう者、様々な反応を見せた。両作品を読み比べて新たな発見をすることができ、作品の奥深さについて考えさせられた。それも生徒が真剣に取り組み、読み込んでくれたおかげだと思う。毎日が新しい出会いと勉強であり、生徒と共に日々一歩ずつ成長していきたいと思う。

辞書を楽しむ

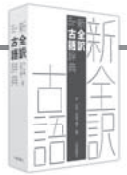
五輪美智子（ごわみちこ）
元福島県立須賀川桐陽高等学校長

国語教師には多くの喜びがある。中でも上位に入るのが、苦労こそあれ、「古典文学への誘い役」になるという、やり甲斐のある喜びである。

真新しい教科書と辞書を机上に置く新入生の一人でも多くが、古典の存在に刮目し、そこから長い人生を生きる心の糧を得ることができるか否かは、まさに導入期の魅力的な授業の実践と、辞書引きの習慣の確立にあると、私は確信している。

しかし現実は厳しく、大手の教育総合研究所の調査によれば、ここ一五年、国語を好きな教科に選ぶ小中学生は減り続け、二〇一五年にはとうとう、小中学生ともに第九位に転落。そういう彼らに古典を教えねばならないのが、今の学校現場の実状である。

受験に必要との言い訳も老いの繰り言と知りつつも、「辞書引きこそ古典の基本の基」と、「辞書を繰る音に如くものぞ無き」と奮闘した実践を紹介する。



❖辞書を「引く」

まず、「辞書を引かないのではない、授業が引かせないのだ」という発想から始めたのが、クラス全員分の辞書を準備してでも、辞書を引かせる取り組みである。「辞書を繰り、全員一斉に同じ古語を探し出し、納得し、考えながら、古典ワールドに旅立つ」というシナリオを幾つか準備し、目の前にいる生徒に一番合うものを選んで授業を実践する。

新しい言葉を我がものにするため、一斉に頭を使い、ページを手繰り、行きつ戻りつ古語を探し出す。こうしたもどかしい経験は、ＩＣＴメディアの申し子である現代の生徒たちには大切なはずだ。65％もの生徒がインターネットを駆使して情報を得る時代だからこそ、自力での辞書引きに取り組ませたい。

例えば、最初に「今」を引く。名詞だし現代語だから引きやすく、「現在・今、この時」という語義を、彼らは当たり前だと納得する。次に「今」の対義語を問うと「過去」という答えが返ってくる。そこで過去を引くと古語辞典にはない（ここでもし、「くわこ」で「過去帳」を出してくる生徒がいたら拍手喝采）。他に過去にあたる古語を問えば、数名が「昔」と呟く。そこで初めて「今は昔」という一節を板書し、その訳を問う。ここで、彼らが小中学校で経験済みのアクティブラーニングの力を拝借し、話し合わせて訳を発表させる。反応が悪い場合は、「昔今」を辞書で引かせ、「昔のことと今のこと」との意味をヒントにして、再度挑戦させるとよい。そこで出た生徒の答えを活かしつつ、「今となっては昔の話だが、その時」と口語訳を板書し「今では昔話だが、その時を生きた人の話を紹介するときの決まり文句である」と説明。なにしろ昔のことなので、我々の想像や常識を越えた人が登場するときもあるが、それはそれで楽しんでほしいと繋ぐ。教材が『宇治拾遺物語』なら「児」、『竹取物語』なら「翁」、『伊勢物語』なら「あり」を、次に一斉に引く古語にして、昔の「今」を確かに生きた登場人物に迫ってゆく。

『伊勢物語』で「あり」を引く理由は三つある。一つ目は、この「あり」は連用形だが、辞書を引けば、言い切り、すなわち終止形が、「ある」ではなく「あり」であることが一目で分かるからである。その際、終止形が「り」で終わる動詞四つを教えてしまってもいい。

二つめが、紙の辞書の最大の強みで、「あり」のつく語が語義まで一覧できることである。「ありあけ」「有り明けの月」が出て「ありありて」「ありか」「ありがたし」と読み進められる。一語から名詞や動詞、形容詞と姿を変え、類義語が出てきたり、さりげなく重要古語に出くわしたりする。そんな紙の辞書が持つ言葉の広がりは、手軽でスピーディーな電子辞書にはないものである。

三つめは、「あり」の意味に広がりがあることである。「人や物がそこに存在すること」、つまり「生きていること・無事であること」という「あり」の語義を辞書でしっかり学習できれば、「東下り」のフィニッシュの「わが思ふ人はありやなしやと」の「あり・なし」が、自分の一番大切な人の生死に関わる重大な意味であることが把握できる。

さらに、「あり」の対義語としての「なし」を定着させるために、話の冒頭に出てくる「やうなし」(または「なし」)を引くと、「無し・亡し」の漢字が目に飛び込んでくるため、より理解が深まる。もっとも「あり・なし」の意味が身にしみてわかるようになるのは、彼らがもっと大人になってからだが。

あ・り【在り・有り】[自ラ変]《補助動詞ラ変》[をかりかり]

これで覚える! **広く人や物事が存在する意。さまざまな語に付いて、〜である。〜ている。」の意も表す。**

竹取〈〉[(1)今は昔、竹取の翁ぁといふ者ありけり 訳[今ではもう昔のことだが、竹取の老人という人がいたということだ] 更級〈大納言殿の姫君〉〈(2)この猫の声にてありつるが、いみじくあはれなるなり 訳[この猫の声であったのが、たいそうあわれに感じられたのです]

一 [自ラ変一 ❶事物や事柄がある場所に、またはある時間に存在する意。人や動物がいる。居合わせる。生きて暮らしている。住んでいる。居合わせる。時が経過する。事が行われる。例〈〉竹取〈〉[脱ぎ置く衣ぁに包まむとすれば、ある天人包ませず 訳[脱いで置いていく衣に(不死の薬を)包もうとすると、そこに居合わせた天人が包ませない] 枕草子〈宮にはじめて参りたるころ〉〈しばしありて、前駆ぁ高う追ふ声すれば 訳[しばらくたって、声高く先払いをする声がするので]

こういったシナリオを準備して、学年全体で引く単語を決め、とにかく一年中、辞書を引く授業を展開する。二・三年でも、例えば『枕草子』なら「曙」、『源氏物語』なら「御時」というように全員で必ず引く古語を決めておくと、授業実施計画(シラバス)も立てやすく、学年全体での辞書引きの習慣も持続できる。こうした辞書引きへの取り組みは、古文のみならず、現代文や漢文、さらには英語へと広がる。その結果、学年の力が分厚くなってゆくのを、何度も実感できたことも、付け足しておきたい。

ありあけ【有り明け】❶夜が明けかけてもまだまた、その月。陰暦十六日をいう。月の場合、必ずく十六日以後の夜更け。る。季秋 ⇩ 句 有り明け 枕草子〈職の御曹司におはしけのいみじう霧ぁりわたりころのひどく霧が立ちこめ奥の細道〈旅立〉[月は有り明のから 訳[月は有り明て]◎ ⇩ ウォーキング・26 ❷夜明けまでともしている行灯ぁん。 狂言〈連歌盗人〉たしなうだにおかれた 訳[たしなみの灯火をともしておおきに

ありあけづき【有り明け月】空に残っている月。残月 ⇩ ウォーキング・26 ●シノ

ありあけ-の-つくよ【有り明けの月】月が出ている夜。

ありあ・ふ【有り合ふ】[

❖辞書を「読む」

一つの教材を終え次に入るときや、テストの解答や解説を終了した後の細切れの時間を使ってできるのが、「辞書を読む」グループ学習である。

見出し語の語数が一番少ない「ら」行を利用し、「ら・り・る・れ・ろ」の五〜七グループで、辞書を隅から隅まで読む(「ら」「り」は語数が多いので二グループずつに分けてもよい)。品詞別に語数を数えたり、読みや意味で友達に教えたくなる古語を選出したりして原稿にまとめ、発表する。

ら行には頻出の助動詞や、「来迎・輪廻・霊験」などの仏教用語が出てくる。また、友達に教えたくなる古語では「乱声・竜頭鷁首・瑠璃・連理の枝・六条御息所」などがあげられた。発表原稿は印刷し、古文用のファイルに各自綴じ込む。国語科では漢文や現代文にも色違いのファイルを持たせ、他の発表やテスト・校外模試などを綴じ込み、一種の辞書としての役割を持たせている。

この実践で好評だったのは「心・もの・思ひ」が語頭に付く語での辞書読みである。「心」は「心・情」から始まり「心当て・心あり・心憂し・心苦し・心尽くし・心なし・心にくし」などなど、語が尽きない。「心」は人間の精神作用の根源を表す点で、現代語にも共通するため、「心あまりて言葉足らず」と、感情が溢れ出て言葉が追いつかない在原業平の和歌に納得できる生徒も多いだろう。一方、古語の概念では、「身」と対応する語としても捉えられ、「心」が「身」に収まりきれなくなると「物の怪」になってしまうこともわかり、言葉の裾野がどんどん広がってゆく。

長期休業中に「辞書を読む」でレポート作成をさせたこともある。一人辞書をめくり、「見ぬ世の人を友にする」兼好法師の気分を味わうのも一興。人の心が種となり万(よろず)の言の葉になるのだから、言葉から広がる世界を辞書で読むのは実に楽しい。

りょうとうげきしゅ【竜頭鷁首】[名](「りょうどう」とも、「げきしゅ」とも)船首に竜の頭と鷁の頭を彫刻した二隻の船を付けた、二隻一対の船。貴族が園遊のときなどに池に浮かべ、楽人を乗せて音楽を奏させた。源氏物語 訳[竜頭鷁首を、としうらひて 訳[竜頭と鷁首との一対一隻の船を、唐風の装束で仰々しく飾り立てて]

りょうら【瑠璃】[名]紺色に近い美しい宝石。

りょくい【緑衣】[名]六位の官人の着る緑色

こころは【心根】[名]心の根元。

こころ-の-あき【心の秋】心に思ひのみ、秋がに陶潜ぁたかけて、言今集 恋三 昔、この歌をかけて、秋に変わるように、あなたのことが変はつらいことだ

こころ-の-いと-ま【心の暇】も心がおだやかな時。一の源氏 訳[心がおだやかな時、

こころ-の-いろ【心の色】❶性格。ようす。気持ち。の表れ。 東国人は心の色なさ、

こころ-の-うら【心の占】心の恋、予想。 古今集 恋三 かく恋ひたひたきり心の占をまさしかりける 訳[したうもなく私を予感していた、に頼りはなかった]

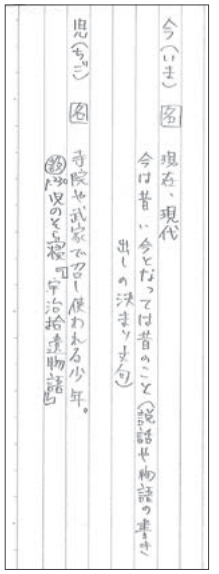
こころ-の-おきて【心の掟】心の

こころ-の-おに【心の鬼】❶疑

❖辞書を「作る」

継続的な取り組みとして、辞書を作る実践がある。

一年生からノートの左端六〜七行分に、クラスで一斉に引いた古語や、自分で引いた古語、気になる言い回しなどを書くメモ欄を作成するものである。



メモ欄は、週末などを利用して整理し、「一枚の紙に一単語」（余白に書き足していけるため紙はA4）で単語帳を作成する。

例えば「児」の単語帳には、まず『宇治拾遺物語』での意味を書く。学習が進み、『枕草子』で「瓜にかきたる児の顔」が出てきたら「赤ん坊」の意味、『源氏物語』で「さてもうつくしかりつるちごかな」が出てきたら「少女」の意味を書き足してゆく。

単語帳は前出のファイルや紙袋にため込んでゆき、五十音順に並べ替え「マイ古語辞典」にしても、作品ごとに引いた古語で、例えば、「伊勢の辞書」「枕の辞書」を作ってもいい。その辞書をクラスで貸し借りし、自分の辞書を訂正したり補完したりする。また、「自分のベスト古語」を発表し、選んだ理由やこれぞという例文などを教えあうのもよい。

今まで生徒が発表した「ベスト古語」で忘れがたいのが「えい」。言わずと知れた『宇治拾遺物語』「児のそら寝」の「いらへ」である。生徒は「えい」を調べ「えい」が主人から召使いへの返事の仕方だということにたどり着き、「目上の僧たちへの返事として児の「えい」は不適当ではないのか。何回読み返しても、僧たちの笑いは明るく温かいが、もしかしたら、答えるタイミングを失った面白さだけでなく、普段僧たちが児に使う「えい」を、生意気にもつい使ってしまった児への『よくもまあ』という笑いもあったのではないか」と考察した。

この発表で、恥ずかしながら私も、自分の授業が通り一遍の口語訳で終わっていたことに気づかされ、青くなって勉強し直した。辞書を引き、読み、考えることの大切さを思い知らされた忘れがたい実践であった。ラーニングピラミッドによれば、記憶に残る割合は実体験が75％、人に教えたときが90％である。このことからも、友人同士で教えあう授業は、生徒にとっても我々教師にとっても、効果的であるといえる。

受験を考えると授業はついつい文法指導に偏り、教科書を離れ文法のテキスト中心になる。それが、辞書を引かなくなるきっかけになる。そこで思い切って教材を百人一首にし、「辞書作り」とセットの授業を展開した。とにかく百人一首から動詞と覚しきもの全てを拾い出し、片端から辞書を引き単語帳にするという内容である。ターゲットを動詞にしたのは、動作というのは今も昔もあまり変わらず、初心者でも見つけやすい品詞だからである。

愚直なやり方かもしれないが、「我が衣手は露にぬれつつ」の「ぬれ」を引き、「濡る…ラ行下二段活用。雨や涙でぬれること」と単語帳に書き込む。多くの辞書が百人一首の一番のこの歌か、万葉集の大津皇子と石川郎女の絶唱「我立ち濡れぬ」や「君が濡れけむ」を例にあげていて、こういった例文との出会いが学びを深めてくれる。

ちなみに百人一首を品詞分解すると一五二〇語。内訳は多い順に、助詞・助動詞（七三〇語）、名詞（四四七語）、動詞（二五八語）、形容詞・形容動詞（四九語）である。

動詞だけでも二五八語あるので、一人では大変だという場合、グループで何首かずつ分担してもよい。

一番数が多い助詞・助動詞（うち助動詞は一五二）の学習として、百人一首から助動詞を拾い出し、意味と終止形と活用形を簡単に書かせる（例：「り」完了「り」連用形）のも、二年生後半の助動詞のまとめの時期、三年を控えた春休みの宿題にして効果的であった。また、形容詞・形容動詞を中心に学習したい場合は、日記や随筆、物語ジャンルの作品を用いるのがよいだろう。

1 秋の田の かりほの庵の 苫をあらみ
我が衣手は 露に濡れつつ
天智天皇

2 春過ぎて 夏来にけらし／白妙の
衣干すてふ 天の香具山
持統天皇

4 田子の浦に うち出でて見れば 白妙の
富士の高嶺に 雪は降りつつ
山部赤人

また助動詞の学習として、助動詞の単語帳作りもよい。文法のテキストで「る・らる」から順に暗記するより、助動詞を直接辞書で引き、「受身・尊敬・可能・自発」の用例を調べて、自分の助動詞辞書を作る。教科書や問題集、模試などで、よい例文が出てきたときに書き足す方法で、自分だけの助動詞辞書を拡充してゆけば、ジワジワと古文の力がつくこと間違いなしである。

以前、古典の教材*三三編から助動詞を抜き出して分類を試みたことがある。その結果、助動詞は一三五九個あり、分類は次の通り（語は多い順）。

・完了（たり、ぬ、り、つ）…四三五
・推量（む、べし、らむ、まじ、じ、めり、けむ）…二一九
・過去（けり、き）…二一七
・打消（ず）…一九一
・断定（なり）…一六〇
・使役・尊敬（さす、す、しむ）…六六
・受身・尊敬・可能・自発（らる、る）…二六
・その他…四七

多く使用される助動詞は①ず②たり③なり（断定）④けり⑤ぬ⑥む⑦り⑧き⑨べし⑩さすの順だった。

上位一〇語は、我々が力を入れて教える助動詞である。打消「ず」と断定「なり」が多いこと、推量もまずは「む」と「べし」を教えておけばなんとか文脈を捉えられるとすれば、助動詞を教える順番も変わってくると思う。

例えば、断定「なり」は体言に付くので見分けやすいし、辞書を引けば、もとは「にあり」だとわかるので、既習の「あり」を思い出せば、存在を表すことにも納得がゆくはずである。また、辞書では推定「なり」がすぐ側にあるし、一ページめくれば動詞「なる」も出てくるので、学習内容がぐっと深まるはずだ。辞書ほど素敵なものはない。

*『宇治拾遺物語』（児のそら寝・絵仏師良秀）／『竹取物語』（かぐや姫の生い立ち・かぐや姫の昇天）／『徒然草』（つれづれなるままに・神無月のころ・をりふしの…・九月二十日のころ・仁和寺にある法師・名を聞くより…・ある人弓射ることを習ふに・花は盛りに）／『伊勢物語』（東下り・筒井筒・渚の院）／『方丈記』（行く川の流れ・養和の飢饉）／『土佐日記』（門出・馬のはなむけ・帰洛）／『枕草子』（春はあけぼの・すさまじきもの・九月ばかり・うつくしきもの・五月ばかりなどに…・雪のいと高う…）／『更級日記』（門出・源氏物語）／『源氏物語』（いづれの御時にか・北山の春・垣間見）

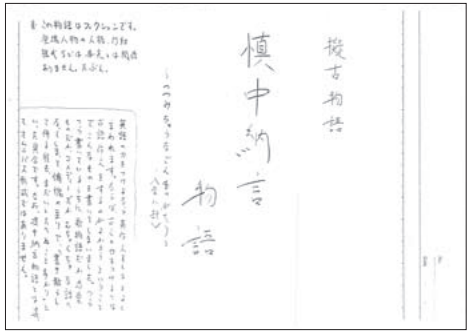
❖辞書を「楽しむ」

さらにハイレベルな学習として、教科書掲載以外の古文をプリントにし、自力で訳を試みる生徒に添削指導を行った。

実は私も高校時代に、辞書を引いては古典を訳し、先生に添削していただいた経験がある。下手な口語訳でも、辞書さえあれば自分だけの『枕草子』や『徒然草』になる。そんな喜びを味わいながら、高二の秋、一八歳の光源氏に遭遇し『源氏物語』に夢中になったのが、ついこの間のことのようだ。辞書は頼りがいのある知性豊かな友であり、私は辞書との付き合いを存分に楽しんだのである。

そういう経験を是非味わってほしいと切に思う。

生徒の中には添削を超え、擬古物語を創作した猛者もいた。「英語の力をつけるなら英作文をしろとよく言われます。ならば古文の力をつけるには古語作文をするのがよかろうということで、こんなものを書いてしまいました。〈中略〉むちゃくちゃな話になってしまって慚愧の至りで『書き散らして侍る程も、まだいとたへぬこと多かり』といった具合です。なお『堤中納言物語』とは違ってオムニバス形式ではありません」と断り書きをして『慎中納言物語』という作品をまとめた。主人公は慎み深い中納言で、ある夜、妙なる和琴に誘われ、築地の崩れから忍び込み、群薄の下陰に隠れ美女を発見。しかし慎み深い中納言なので「いかで得てしがなとは思せど、はや暁にもなりぬればやめ給ひつ」と展開。雀の子を飼う妹君や物の怪も登場し、歌のやり取りの末、めでたく結ばれるという物語。『伊勢』あり『源氏』ありの作品で、三年間の辞書引き授業も捨てたものではなかったと、国語科全員で読んでは笑い、感心しては楽しませてもらった。



やはり、辞書は楽しい！

辞書を繰る音が響く国語教室には、未来が開けると確信して、筆を擱く。

新人教師のための漢文指導入門講座 中級編⑥

「WEB国語教室」連動

句法指導の心得
―四大句法④ 反語

塚田勝郎
筑波大学附属高等学校教諭

1 なぜ反語は大事なのか？

ある予備校の調査によれば、センター試験で最もよく問われる句法は反語の形だそうです。その尻馬に乗って、「だから反語は大事だ。」と主張するつもりは毛頭ありませんが、筆者も句法学習の山場は反語の形だと考えています。なぜ反語の形は重要なのでしょうか。

第五回では、反語の重要性についてこう述べました。

反語文は文意を強調するという性質から、作者や話者の思いや主張、訴えを強く表している場合が多く、読解上重要な箇所と考えてよい。

疑問文との違いを、このように整理することも可能でしょう。

> 疑問文…疑問や理由を問いただすことが目的。
> 反語文…疑問文の形を借りて、強い感情を表すことが目的。

筆者が受験勉強でお世話になった『漢文研究法』（小林信明著、洛陽社、一九五七年初版）には「（疑問と反語の区別の目やすは）一に感動の意を含んでいるかいないかにある。」との記述がありますが、そそっかしい高校生は「感動の意」の意味を狭くとらえてしまうかもしれません。そこで、筆者は「強い感情」の語を使うようにしています。

反語文が読解上重要であることを示す好例があります。古典Bの定番教材の観がある柳宗元の「捕蛇者説（唐宋八家文読本）」には、三箇所に反語の形が出てきます。

a　豈若吾郷隣之旦旦有是哉。〔豈に吾が郷隣の旦旦に是れ有るがごとくならんや。〕

［どうして同郷の人々が毎日命懸けの危険を冒すのと同じといえようか。］

b　安敢毒耶。〔安くんぞ敢へて毒とせんや。〕

［どうして苦痛に思ったりするだろうか。］

c　孰知賦斂之毒、有甚是蛇者乎。〔孰か賦斂の毒、是の蛇よりも甚だしき者有るを知らんや。〕

［いったい誰が、重税を割り当て、厳しく取り立てることの害毒が、この蛇の害毒よりもひどいことを知っているだろうか。］

a・bは、蛇捕りをなりわいとする蔣氏の発言の終末部分にあり、cは、それを受けた地の文の末尾に位置しています。a・bからは、「辛い蛇捕りの仕事も、近隣の人々が日々税の徴収に苦しめられるのに比べれば、まだましだ。」という「強い感情」が読み取れます。またcには、「苛斂誅求の害が、毒蛇の害よりもはなはだしいことを、いったい誰が知ろうか。」という怒りの交じった「強い感情」がこめられています。反語文に注目すれば、その文章の要旨が把握できるともいえそうです。

「捕蛇者説」の例は、偶然の条件がそろっての結果かもしれません。しかし、反語文によって作者や話者の「強い感情」が読み取れることは、疑いようのない事実です。

2 反語はどう訳すか？

疑問と反語の見分け方と並んで生徒が苦労するのは、疑問文と反語文の訳し分けのようです。筆者が「疑問と反語は形が同じ所がポイントなのだから、どちらも『どうして～か。』でよいのだ。」と説明しても、なかなか納得してもらえません。「反語の場合は、『どうして～か。いや、～ではない。』式に当てはめればよいではないか。」とお考えの向きもあるでしょうが、「いや、～ではない。」を添えただけでは「強い感情」を表したことになりませんし、そもそも現実的な言葉遣いではありません。

では、どうすれば「いや、～ではない。」を用いずに、平易な現代語訳を作れるでしょうか。

○安求其能千里也。（韓愈・雑説）〔安くんぞ其の能の千里なるを求めんや。〕

［どうして千里を走る能力を望むことができるだろうか、いや、できない。］→ 望めるわけがない。

○故郷何独在長安。（白居易・香炉峰下、新卜山居、草堂初成、偶題東壁）〔故郷何ぞ独り長安に在るのみならんや。〕

［故郷はどうして長安だけにあるだろうか、いや、そうではない。］→ どこにでもあるのだ。

このように、文と反対の内容を示すことで、強調したい真意が明確になります。続いて、代表的な疑問詞である「何」を含んだ反語文を例にあげて、反語文らしい現代語訳をさらに探ることにします。

○我何面目見之。（史記、項羽本紀）〔我 何の面目あ

りて之に見(まみ)えん。」

［私はどんな顔で彼らとお会いできようか。］

○何 辞(ゾセンヤ)為。（史記、項羽本紀）［何ぞ辞せんや。］

［別れの挨拶などしていられるものか。］

また、反語の強い感情を表すという使用目的に照らせば、次のような現代語訳も可能でしょう。

○帝力何 有(ゾラン)於我(ニ)哉。（十八史略、巻一、五帝）［帝力 何ぞ我に有らんや。］

［天子様のお力などわしらにはなんの関係もない。］

○精神一到、何事 不(カラン)レ成(ラ)。（朱子語類）［精神一到、何事か成らざらん。］

［精神を集中すれば、どんなことでもできないことはない。］

3　反語の形の学習の実際

今回も、高校三年生の授業で用いている「反語の形の総まとめ」のプリントをご紹介します。用例はすべて既習のもので、初見の白文を読むことを目標にしているわけではありません。授業では筆者が訓読を示し、生徒はそれに従って返り点と送り仮名を付していきます。前回の疑問の形のプリントと異なり、例文にはすべて現代語訳を添えています。反語の現代語訳に迷う生徒への配慮からです。

反語の形　　句法シリーズ#04

訴え、怒り、嘆き、悲しみなどの強い感情を表すために用いる修辞的な表現である。表面上疑問の形を用いることが特徴で、否定の語を含むものは肯定を表し、そうでないものは否定を表す。

［疑問の形］で取り上げた疑問詞や助字は、多くの場合反語の形でも用いられる。したがって、疑問と反語との区別は基本的には文脈で判断するしかない。

■タイプ1　文頭に疑問詞を用いる形

反語の形は、次の例のように「どうして辞退しようか。」と表面上疑問の形をとりながら、「辞退するつもりはない。」という強い感情を表す。この場合、現代語訳は「辞退などしない。」としてもよい。

厄酒 安 足 辞。

訳　大杯の酒など、どうして辞退いたしましょう。（辞退などいたしません。）

我 何 面 目 見 之。

訳　私はどんな顔をして彼らにお会いできようか。（彼らに向ける顔などない。）

割 鶏 焉 用 牛 刀。

訳　鶏を料理するのに、どうして牛刀を使う必要があろうか。（牛刀を使う必要は、まったくない。）

■タイプ2　疑問詞と文末の助字を併用する形

反語の形は、文頭に「安・豈・何・誰」などの疑問詞を置き、文末には「哉・乎・耶」などの助字を置くことが多い。

安 敢 毒 耶。

訳　どうして苦痛に思ったりするだろうか。（少しも苦痛ではない。）

豈 若 吾 郷 隣 之 旦 旦 有 是 哉。

訳　どうして同郷の人々が毎日命懸けの危険を冒すのと同じといえようか。（それとは到底比較にならない。）

此 何 遽 不 為 福 乎。

訳　これがどうして福に転じないことがあろうか。（必ず福に転じる。）

得 非 君 殺 之 耶。

訳　あなたが我が娘を殺したのではないといえようか。（あなたが殺したのだ。）

■タイプ3　反語専用の形

次の二例は特殊で、反語の専用形である。疑問の用例はない。

籍 独 不 愧 於 心 乎。

訳　私はどうして心に恥じたりしようか。（心に深く恥じずにはいられない。）＊注「籍」は、項羽の名。

百 獣 之 見 我 而 敢 不 走 乎。

訳　獣たちが私を見たら、どうして逃げないだろうか。（必ず逃げるにちがいない。）

■タイプ4　詠嘆の意味を含んだ反語の形

次の二例は、詠嘆の意味を含んだ反語の形で、「なんと～ではないか。」と訳してよい。

学 而 時 習 之、不 亦 説 乎。

訳　（礼を）学び、その内容を機会あるごとに復習するのは、なんとまあ喜ばしいことではないか。

是 何 楚 人 之 多 也。

訳　なんとまあ楚出身の兵士の多いことよ。

■タイプ5　再読文字の「盍」も、実は反語の意味を表す

「盍」は、「何不」の合字。したがって、「盍ぞ～ざる」と訓読することになる。再読文字としての側面だけを意識しやすいが、反語の意味であることを忘れてはならない。

盍 各 言 爾 志。＝何 不 各 言 爾 志。

訳　どうしてめいめいの志望を言わないのか。（めいめいの志望を言ってごらん。）【勧誘の意味】

盍 反 其 本 矣。＝何 不 反 其 本 矣。

訳　どうしてその根本に立ち返らないのか。（その根本に立ち返るべきだ。）【詰問の意味】

タイプ4は、疑問と反語、反語と詠嘆はまったく別物であるという認識を持った生徒には、やや受け入れがたい内容かもしれません。その際には、次のような例を使った説明も有効でしょう。

「君がA大に合格したって。」

1　ふつうに言えば、疑問文になる。

2　「まさか、ウソだろう」という気持ちをこめて言えば、反語文になる。

3　「すごいなあ」という気持ちをこめて言えば、感嘆文になる。

（『漢文語法ハンドブック』江連隆著、大修館書店、一九九七年）

次回は、一度句法から離れて、再読文字を扱います。

この連載は大修館HP内「WEB国語教室」でも読むことができます。次回は「WEB国語教室」に12月頃アップする予定です。

古典のとびら

教室で出会う〈江戸時代〉

――〈笑い〉と〈草双紙〉を軸として

山名順子（やまなじゅんこ）
川村学園女子大学文学部准教授

大学の教員になってしばらく経ったころ、学生たちが驚くほど〈江戸時代〉を知らないということに気がついた。授業中に挙げた作者や作品の名前に対する反応も芳しくない。焦りが募った。質問の相手が国語科教育法の履修生だったからである。「江戸時代の文学について高校までに学んだことを書き出してみましょう、単語でもかまいません」と震えながら発問した結果、次のような回答を得た。

『奥の細道』（冒頭部の暗唱、学習）／川柳・狂歌・俳諧（一茶・蕪村）／本居宣長の作品／歌舞伎鑑賞教室『義経千本桜』／文学史（試験のための暗記）／日本史の授業（山東京伝・恋川春町・好色一代男・解体新書・東海道中膝栗毛・十返舎一九・南総里見八犬伝・馬琴）／徳川家康は征夷大将軍／記憶にない

想像以上の惨状に愕然としたが、思い返せば筆者がかつて中学生・高校生だった頃にも、〈古典〉といえば王朝の物語や中世の説話・軍記であり、和歌であった。〈江戸時代〉が国語科の授業で話題の中心になることは『奥の細道』を除いてほとんどなかったし、文学史を体系的に学ぶ機会もなかったように思う。筆者自身も中世文学の文体に憧れて大学に進学したくちで、〈江戸時代〉に出会ったのは学部二年生の時だし、その魅力の虜になったのは近世日本文学を専攻として選んで三年目、修士二年の時だった。

国語科教科書における近世日本文学のうち、採録数がずば抜けて多いのは『奥の細道』である。本作品は明治二十年代から教科書に採用され、現在に至るまで高い採録率を誇る定番中の定番教材であり、平成九年度国語科教科書では、中学校国語教科書五社すべてが「序章」と「平泉」を採録している（藤原マリ子『『おくのほそ道』の本文研究―古典教育の視座から―』、新典社、二〇〇一）。現行の教科書でも、『奥の細道』は中学校三年生の共通教材であり、とくに「旅立ち」、「平泉」、「立石寺」の三章は不動の人気を誇る。高等学校の教科書でも、これら三章の採録率が圧倒的に高い。他の〈江戸時代〉の教材としては、井原西鶴の浮世草子、近松門左衛門の浄瑠璃、十返舎一九の滑稽本、狂歌・川柳といった当代性を持つ作品と、本居宣長『玉勝間』、松平定信『花月草紙』、上田秋成『雨月物語』といった雅文体の文章が採録されているが種類も数も決して多いとは言えず、採録数だけで見れば、国語科の教科書で最も重視されている〈江戸時代〉の文学は『奥の細道』、すなわち〈俳諧〉ということができるだろう。

では、生徒はどれほど〈俳諧〉を知っているのか。前述した学生の回答から察するに、生徒たちは俳句が江戸時代に発展し、五七五七七の形や季語を持つということ、芭蕉や蕪村、一茶の名は知っている。一方で、俳句に関わる〈俳諧〉のおおまかな歴史や、俳人たちの活躍した年代についての知識には乏しく、極端なものではこれら三俳人が友人同士だと誤解している例もあった。

筆者は共通教材としての『奥の細道』には、暗唱や文法事項の学修以外にも、文学史の確認や高等学校での本格的な古典教育への導入としての役割が期待できると考える。例えば、芭蕉が活躍したのは江戸時代の前期だが、多くの学生がそのことを忘れている。しかし、芭蕉がほぼ同時代に活躍していた西鶴の俳諧を批判していたと言うと、おもむろに興味を示す。〈有名人〉の〈意外な〉ゴシップに目を輝かせる生徒とともに、西鶴の出発点が俳諧であったこともすかさず再確認する。まさに一石二鳥の題材である。また、芭蕉の偉業『奥の細道』が、東北の歌枕を訪ねる目的をもっていたことも、学生の半数は覚えていない。しかし、「芭蕉は西行の追っかけで、五百年の時空を超えて〈聖地巡礼〉をした」と説明すると興味を持ち、理解を示す。学生の多くが、高校時代に歴史上の人物や文豪、特定のアーティストや作品の跡を慕った経験を持ち、あこがれの人の吸った空気に触れたい、というファン心理に共感することができるからだという。同時に、〈元〉生徒たちは五百年を飛び越えるファンって少し気持ち悪い、と明るく笑う。

筆者は、この〈意外性〉と〈笑い〉こそが、〈江戸時代〉

の文学の一要素であり、生徒や学生の意欲的な学習につながる重要なカギになりうると考えている。近年、大学でもアクティブ・ラーニングの必要性が強調されているが、筆者は中学校および高等学校における非常勤講師としての経験と授業実践を踏まえ、生徒が教室で考え、学んだ（Think）ことを一組以上の生徒同士（Pair）で共有（Share）する、Think-Pair-Share 型のアクティブ・ラーニングを、大学の講義に積極的に導入している。特に、適度な言語活動と〈笑い〉を伴う「Share」が学生の学習意欲と授業の理解度を高めるのに大きく貢献すると考えるためである。同時に、この〈笑い〉を伴う「Share」は、文部科学省国語ワーキンググループで検討された中等教育の国語科における「感性・情緒の側面」「他者とのコミュニケーションの側面」にも、〈笑い〉を通じて〈江戸時代〉に興味を持ち、生徒同士でより深く学ぼうとする意欲的な学習態度を育成する点で応用できるとも思われるため、国語科教育法の指導でも、教室での「Share」の必要性に折に触れて言及している。高大連携の求められる今、注目すべき要素であろう。

そこで、この〈笑い〉と〈江戸時代〉の文化の継承・発展とを結びつける教材として、〈草双紙〉を提案したい。草双紙とは近世中期から江戸で出版された本（地本）の総称であり、幼い子ども向けの縁起物でもある赤本、青年読者向けの青本、それらの再版本である黒本などを含む。また、絵を読むことを眼目とした〈絵本〉であるという大きな特徴を持つ。

例えば、本来子ども向けであった赤本は平仮名を中心とした変体仮名で書かれているため、絵を読みながら簡単な変体仮名を読むのに適した教材となりうる。現行の中学校・高等学校の教科書の中には変体仮名の存在やおもしろさに言及するものもあるが、その数は決して多くはない。しかし、教室で簡単な変体仮名を読む実践を通して、生徒の多くが〈自分からかけはなれた遠い存在〉だと考えている江戸の人々が、実は自分と同じように絵や文字を読み、笑っていたということに気づき、積極的に作品の解読に取り組むことがわかった。つまり、草双紙は伝統的な言語文化への意欲を高める契機ともなる教材といえるのである。

二〇〇五年の学期末、都内の中学校で非常勤講師をしていた筆者は中学校一年生の教室に赤本『枯木に花咲せ親仁』を持ちこんだ。今なお『花咲かじいさん』の名で親しまれる教訓的な昔話である。見慣れない文字に悲鳴をあげた生徒たちは、しかし六人を一グループにしていざ読み始めれば、案外すらすらと読めることに気づいたようで、相互に教えあいながら上手に読む。先述のとおり赤本は幼児が絵を読むことを第一に作られた作品であり、書き入れも概ね仮名で書かれている。実践授業では仮名文字の対照表などは配布せず、机間指導の合間に板書をまじえて読み方を説明するにとどめたが、内容の把握にはそれで充分だったようである。授業中、生徒からは、「絵が面白い」「会話文がおもしろい」「字よりも絵のほうが細かく書いてある」など、活発な感想が飛び出し、はからずも赤本の実態にも迫ることができていた。「Share」の成功例といえる。

赤本の簡素で力強い絵には残酷な描写も多い。しかし、生徒たちは目を輝かせて、幼少時に読んだ作品との違いに言及する。読者への配慮や表現の〈洗練〉を経ないざっくばらんな会話文には乱暴な表現もあるが、〈笑い〉の要素がちりばめられている。「江戸の本とか無理！」と言っていたはずの生徒たちも、「思ったよりも読めた」「面白かった！」と満足そうに笑ってくれた。「もっと読んでみたい」という嬉しい申し出もあった。生徒にとって既知の物語を選んだことには生徒の意欲を逸らさないねらいもあったが、赤本の挿絵の大胆なデフォルメや文章表現の面白さは、期待以上に生徒の自主的かつ意欲的な学習態度を引き出したといえるだろう。

また、安永四年（一七七五）から文化三年（一八〇六）までに書かれた黄表紙も、内容は大人向けながら、絵を読むことを目的として作られた草双紙である。物語の内容は当時の流行や文化を活写しており、擬人化や登場人物の軽妙な掛け合いなど、現代にも通じる〈笑い〉の要素も多い。

現在、筆者は大学で黄表紙を〈読む〉演習を担当している。変体仮名を読み、ことばを調べ、挿絵に描かれた江戸の文化や風俗を読み解くことを課された学生たちは、よく調べ、よく笑うが、わからない部分には素直に面白くなさそうな顔をする。生活感たっぷりの作品は、当時の江戸の文化そのものに満ち溢れている。現代の私たちには共感できない部分があって当然であるから、受講生全員で、なぜこれが面白いのだろうと考える。あっ、わかった、と誰かが叫んで教室が〈笑い〉に満ちたとき、学生たちは気づかずに江戸のとびらを開けているのかもしれない。

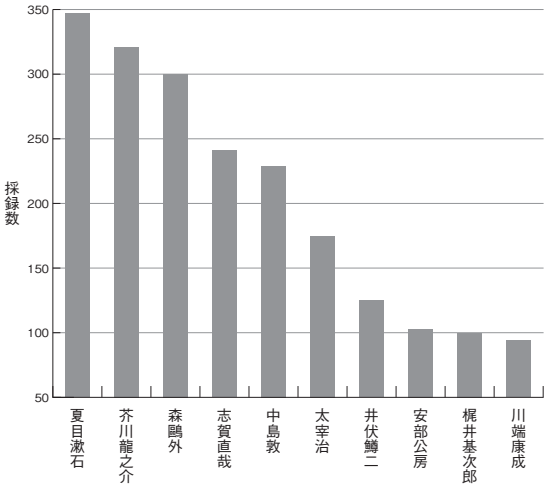
現行の学習指導要領〈国語〉において強調されている「伝統的な言語文化と国語の特質に関する項目」では、教材選定の観点として、日常的な言葉遣いへの関心や、言語文化への関心・理解を深め、国語を尊重する態度を育てること、あるいは生きる力の育成に役立つことと並んで、グローバル社会の中で、我が国あるいは郷土の伝統と文化に親しみ、継承し、発展させるための教育実践を強調している。生徒たちには芭蕉と一緒にまじめに東北を旅するだけでなく、草双紙を「読んで」江戸を〈笑い〉ながら、古典や日本文化に興味を持ってほしいと願ってやまない。

【夏目漱石 生誕一五〇年 特別企画】

いま、漱石を読む

漱石死後一〇〇年となる二〇一六年、生誕一五〇年となる二〇一七年を機に、その現代性を考える。（文責＝編集部）

【図１】作家別教科書採録数



※フィクション限定

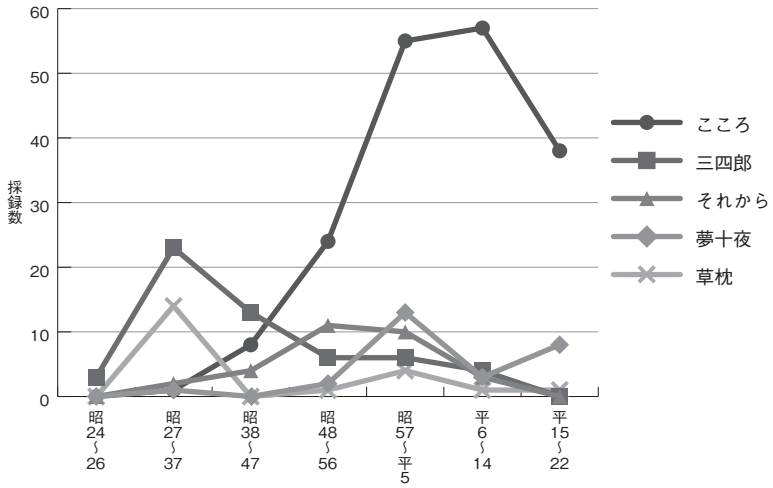
「日本を代表する作家を一人あげてください。」

この問いに対して、多くの人がまず夏目漱石の名前をあげるのではないでしょうか。

二〇一六年一二月九日は漱石没後一〇〇年、二〇一七年二月九日は生誕一五〇年となります。本人が生きて活躍した時代から一世紀以上たっても、いまなお愛される漱石は、まさに、「国民的作家」であるといえるでしょう。

それと同時に、漱石は国語教科書を代表する作家でもあります。戦後、教科書検定が始まってから現在に至るまでの採録数を見てみると、そのことは明らかです【図1】。「羅生門」の芥川龍之介や「山月記」の中島敦をも上回る採録数であることを、意外に感じる方もいるかもしれません。

【図２】漱石作品採録推移



実は、戦後間もない頃に発行された教科書に多く採録された漱石の作品と、現在定番教材となっている作品とは、必ずしも一致しません【図2】。昭和二〇年代に教科書に載っていたのは、「三四郎」や「草枕」でした。現在、高等学校で使われている教科書では、「こころ」（21点）、「夢十夜」（13点）、「現代日本の開花」（5点）が採録数ベスト3となっています（二〇一五年、編集部調べ）。

教材としての漱石は、なぜこのように移り変わっていったのでしょうか。今日の定番教材は、どのような背景があって「定番」となったのでしょうか。この機会に、改めて考えてみるのも一興かもしれません。

『国語教室』では、今号から三号にわたって、漱石の現代性を考える特集記事を掲載する予定です。「WEB国語教室」でも連動した企画を展開します。節目となる今年から来年にかけて、いま、漱石を読む意味を、一緒に考えてみませんか。

※グラフは阿武（二〇〇八）をもとに、編集部で作成した。

『こころ』の「心」を読む〈第1回〉

石原千秋（いしはらちあき）
早稲田大学教授

人は時として自由のためなら命を投げ打つことさえある。この自由は心の自由と行動の自由だが、行動の自由は心の自由の現れと考えられているだろう。しかし、人の「心」はいつまでその特権性、すなわち精神の自由を誇っていられるだろうか。

私たちの心が外的な条件に制約を受けているという考え方は、いまや常識に属するだろう。もし、人工知能にある一つの条件に対して百通りの反応を教え込んだら、それは生きた人間より「心」が豊かなことになるだろうか。こんな想像をしてみたくなる時代に、夏目漱石『こころ』はどんな意味を持つだろう。この問いを考えるために、大正三年当時『こころ』は決して自然な小説ではなかったかもしれないということを、ごく簡潔に書いておこうと思う。

「女のからだ」というフロンティア

近代日本に輸入された資本主義は、フロンティアという言葉と密接に関わりがある。資本主義は次々とフロンティアを「発見」してきた。

文学にとってのフロンティアも未知の領野だった。近代小説は新しいものを伝えるのが重要な役割だった。近代小説は「新しいもの」を次々と取り替えていくやり方で生き延びてきたから、「新しいもの」は次々と変わっていく。たとえば、近代は「自由」が多くの人に与えられた時代だ。その「自由」が「流行」を生み出す。近代とは「流行」の時代である。たとえば、ファッションは流行現象がなければ成立しないジャンルである。

人間のバースコントロールや生殖技術を告発的に研究してきた荻野美保が、『女のからだ』（岩波新書）を刊行した。生物がすべてそうではないが、人間は女性だけが子供を産む。医学にとっての女性の体は生殖技術という名の、そこから利潤を生み出すことができるフロンティアとなった。いまでは子供を産むほとんどすべての段階を、自分の体を使わずにアウトソーシングしてできてしまうところまで生殖技術は「進歩」している。資本主義において「女のからだ」がフロンティアだということを理解するためには、「男の体」という本がほとんど書かれない事実を挙げるだけで十分だろう。

「女のからだ」は文学にとってもフロンティアだった。明治維新以降、日本に進化論が入って来た。進化論は生物学だから、動物には雄と雌がいるという当たり前のことが「問題」として浮かび上がってきた。これを人間に当てはめると、男と女がいるということになる。それが、明治の中頃に男性知識人の間で「両性問題」としてクローズアップされた。逆に言えば、男性知識人にとって、それまで女性は男性と同じレベルの「問題」としては頭の中になかったのだ。「男子と女子とは本来絶対相異なるものにあらで、親しくこれ人類なり」（『男女之研究』明治三七年）などという文章を読むと、この文章の向こうにそうは思っていなかった多くの読者が見える。この本は当時として決して特別な本ではない。当時の本が読めるレベルの中間層にとっても、女性は男性と同じ人類ではなかったのだ。

「両性問題」は生物学的領域だが、それが次第に心の問題に移っていくことになる。明治三〇年代頃から『婦人の心理』というような本が多く刊行される。男性知識人の関心の領域が「女性の体」から「女性の心」に移っていくのである。明治三〇年代には、女性にとって実質的に最終学歴となる高等女学校が普及し始めた。女学生やその卒業生が増えてくる時代だった。男性知識人にとっては、ある程度教育のある女性――品のない言い方をすると「素人女性」が身近にいる日常が出現した。たとえば、電車通勤の時に通学する女学生と身を寄せ合うような経験を日本人ははじめてしたのである。田山花袋は明治四〇年に『蒲団』で有名になるが、『蒲団』の直前に『少女病』という小説を書いている。少女（実際には女学生）に病的に興奮する中年男性が主人公になっていて、まさに『蒲団』以前と言っていい。この主人公は電車で通勤するが、電車で通学する女学生に興奮する。おそらく、視姦を書いた日本ではじめての小説だろう。この興奮は、明治三〇年代に流行した女学生小説の総決算でもあった。それは、女学生が

いわば風俗となった、すなわち近代文学上のフロンティアになった証である。近代文学は「学校教育を受けた女性」というフロンティアを取り込んでいったのだ。しかし、この女学生小説のテーマこそは「女のからだ」だった。当時女学生小説を読む「読者の期待」は、女学生が堕落することにあった。当時の「堕落」とはセックスをして妊娠することだった。女学生小説とは、読者がどうやって女学生が堕落するのかを楽しみに読む小説だったと言っても過言ではない。

明治も四〇年代となると「高級な文化」が生まれた。「高級な文化」が生まれるのには、ある一定のエリアに四つの条件が揃うことが必要である。第一は資本である。第二は知識人が集まることである。第三はそれらを享受できるある程度教育を受けた大衆が生まれることである。第四は有り余る時間である。すべて教育と関わる。この四つの条件が整うと、「高級な文化」が一気に花開く。明治期の東京＝旧一五区は、山の手と大江戸線の内側にほぼ重なるエリアだが、明治四〇年に約二一五万人でピークになっている。その後昭和一〇年にこの旧一五区のエリアの人口は二二五万人で微増にしかなっていない。東京の都心は明治四〇年頃にほぼ完成したのである。明治四〇年に日本の「近代文化」が開花したのは、こういう理由からなのである。この時代に、近代文学が自然主義文学という形で一気に開花した。夏目漱石のデビューもこの時期だから、とても幸運だったと言っていい。「近代文学はいつからか」という問題が議論になることがある。以前は二葉亭四迷の『浮雲』からだったかもしれないが、いまでは明治四〇年前後の自然主義文学の時代から近代文学が開花したという説をとる人が多くなっている。明治二〇年頃の『浮雲』の試みと『小説神髄』の理論が、二〇年かけてようやく一般化したのである。

それを「女の謎」、すなわち「心」の問題に変換したのが漱石文学だった。

「女の謎」というフロンティア

正岡藝陽『婦人の側面』（明治三四年）には「女は到底一箇のミステリーなり、其何れの方面よりも見るも女は矛盾の動物なり」という一節がある。女は体の問題ではなく心の問題であると言っているのである。この時代から徐々に「心」が問題になり始めてきていることがわかる。ポイントは「ミステリー」や「矛盾」である。すなわち、女性の自我を統一的に把握できないのである。あるいは、女性は統一的な自我を持つ存在とは認識してはいなかったのである。漱石文学をよく読んでいれば、「矛盾」という言葉に反応するだろう。『三四郎』の三四郎が上京して同郷の先輩の野々宮宗八を大学に訪ねたあと、池の端にしゃがんでいる場面。美禰子が三四郎の前を通り過ぎて、三四郎は一言「矛盾だ」と言う。三四郎は「わからない」と言っているのである。「矛盾だ」という言葉は、東京帝国大学のエリート学生だから出た言葉ではなくて、ある程度教育を受けた男性に共通する女性の見方だったのだ。

白雨楼主人『きむすめ論』（大正二年）に「知り得たるが如くにして不可解なる者は處女の心理作用である、言はんと欲する能く言はざるものは處女の言語である、問へども晰かに語らざる者は處女の態度である、知って而して知らずと謂ふものは處女である、想ふて而して語らざるものは處女の特性である、不言の中に多種多様の意味を語るものは處女の長所である」という一節がある。「先生」にはお嬢さんのことがわからず、その「心」を自分の「心」で考え続けるが、それが当時として女性のとらえ方の一つなのだというのがよくわかる。

漱石は「女の謎」を書き続けた作家である。『こころ』も例外ではなかった。「先生」があれほど逡巡するのは、人間不信に陥ったからという理由だけではなかった。女性という存在それ自体が、決して解くことができない「謎」だったのだ。「先生」がどうしてあんなにKに敵意を持つのか。それはお嬢さん＝静が信じられないからなのだ。信じられないのはKではなく、お嬢さん＝静であり、その根底には「女の謎」という名の女性不信があった。「先生」の「心」は、その「女の謎」の周りをぐるぐる回り続ける。「先生」の「心」には「終わり」がない。それが、「先生」の「私だけの経験」だった。漱石は、小説に「心」という名のフロンティアを開拓したのである。しかも「先生」は、「思想」は「経験」から生まれるものだと言う。ここに「人は誰でも一生に一篇は小説を書くことができる」という小説観の起源がある。すなわち、『こころ』によって近代文学は「個人の経験と内面」という無限のフロンティアを手にしたのだ。だから、個人主義が重視され、先の小説観が生きている限り、『こころ』は近代文学の頂点に君臨し得るのである。

＊〈第二回〉は「WEB国語教室」で公開予定です。

◉『変わる！ 高校国語の新しい理論と実践』刊行！

高等学校国語科教育の「これまで」と「これから」

早稲田大学教育・総合科学学術院教授
幸田国広

八月二六日に次期学習指導要領の方向性と輪郭を示した「審議まとめ」（中教審初等中等教育分科会教育課程部会）が公表された。二〇三〇年の社会とその先の未来を豊かに築くための教育像が明示されている。「学びの地図」としての学習指導要領の役割、カリキュラム・マネジメントの重要性、「主体的・対話的で深い学び」（アクティブ・ラーニング）の視点、育成すべき「資質・能力」、さらには教育評価の充実等、一方で検討が進められている高大接続改革とともに、これからの公教育の大きな地殻変動を予感させるものとなっている。特に、今回の改訂は高等学校がメインターゲットと言われているように、各教科の科目構成の変更も含めた大胆な提案が目を引く。

高等学校の国語科もこうした教育改革の波の中で大きく変わることが求められている。しかし、昨年八月の「論点整理」からこの「審議まとめ」まで繰り返し言及されている高校国語科の「課題」は根が深い。その課題とは、次のようなものである。

教材の読み取りが指導の中心になることが多く、国語による主体的な表現等が重視された授業が十分行われていないこと、話合いや論述などの「話すこと・聞くこと」、「書くこと」の領域の学習が十分に行われていないこと、古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないこと。

こうした課題の指摘は今に始まったものではなく、戦後の高校国語科の歴史とともに堆積している強固な地層のようになっており、教室の日常はこれまでも幾度となく新しい提起をはねのけてきた。「羅生門」「山月記」「こころ」といった定番の小説教材や、大学入試に頻出する書き手による評論文を読解する授業、古文・漢文の語釈・文法・現代語を行う授業が支配的であり、「教材を教える」発想から脱却できずにいる。「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域が埋没してしまうのも、〈現代文〉〈古典〉という教材ベースの教科構造観によるところが大きい。「国語表現」や「現代語」といった科目が新設されても、一部の実践を除いて、十分にその趣旨が理解されず、また、教材文の読解という教室の光景を変えるような契機とはならなかった（高校国語科の歴史の詳細については拙著『高等学校国語科の教科構造　戦後半世紀の展開』（溪水社）を参照されたい）。

しかし、高校国語科の教室の光景が、大きく変わらざるを得ないと思わせる要因が高大接続改革にはある。具体的な方法論においていまだ不透さはあるものの、大学入試も一体となって「資質・能力」の育成の方向に舵を切ることは間違いない。高校国語科にとってもっとも大きな壁が動こうとしているのである。

次期改訂に向けて、大胆な科目構成が予定されている。とりわけ「国語総合」をやめ、性格の異なる二つの必修科目に分けた意味は大きい。現段階ではいずれも仮称だが「現代の国語」と「言語文化」は、他の四つの選択科目とともに、先に挙げられていた「課題」を踏まえ、国語科で育成すべき「資質・能力」に対応するものである。実社会で生きて働く国語の能力を育成する「現代の国語」と、上代から近現代につながる我が国の言語文化への理解を深める「言語文化」は、当然のことながら従来の〈現代文〉と〈古典〉に対応するものではない。この点、新科目の教科書のあり方は十分にその趣旨を具現化したものとなる必要がある。無論、教科書がどうあれ、教室における実践が、目標・学習活動・教材・評価の関係を明確にし、「資質・能力」の育成に向かうものとして工夫されなければならない。アクティブ・ラーニングも、「審議まとめ」で明確に位置付けられたように、あくまでも「主体的・対話的で深い学び」に向けた授業改善の視点として受け止める必要がある。

こうした地殻変動を前に、教室の実践者は何をどう考えればよいのか。その手助けとなり、指針となるものとして、この度、大滝一登氏（文部科学省教科調査官）とともに編集した『変わる！ 高校国語の新しい理論と実践――「資質・能力」の確実な育成をめざして』を刊行することとなった。ぜひとも、ご一読いただきたい。

【執筆者のことば】

資質・能力の育成に向けた授業改善のために

全国高等学校国語教育研究連合会　会長
佐藤　和彦

現代の社会では、新たな時代に向けた大きな変動が起こっているとされます。同様に高等学校でも、新しい教育に向けた大きな変動が起こりつつあると、多くの先生方が実感されていると思います。その一例が、「大学入試センター試験」に代わる、「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」や「高等学校基礎学力テスト（仮称）」の導入と、大学入学者選抜と一体的になされるであろう、高等学校教育改革です。

現在の高等学校教育については、「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力や人間性等」の学力の三要素を踏まえた指導の不足が、課題として挙げられています。そのため、次期学習指導要領ではその解決が図られます。その際、教員に求められることは、アクティブ・ラーニングの視点からの授業改善や、指導と評価の一体化を踏まえた多面的な評価の充実など多岐にわたります。このような高等学校教育の変革期に、我々国語科の教員は、どのような授業を行うべきなのでしょうか。その道標の一つが、本書であると考えます。

多くの先生方に、本書をご覧いただき、今後の教育改革を見据えた理論とその実践についての見識を、さらに豊かにしていただければ幸いです。そして、これからの時代を生きる生徒に必要な、資質・能力の育成に向けた国語科の授業改善が、全国の教室で確実に実施されることを期待しています。

＊「この実践ここがポイント！②⑨」執筆担当

「高校国語」を探究する書

山梨県立甲府城西高等学校教諭
小林　一之

「桜が枯れた頃」という表現から何を想い描くだろうか。

ロックバンド、フジファブリックの楽曲『桜の季節』の一節だ。冬枯れあるいは枯死した樹か。桜が咲き散る春の情景とは遠く隔たる季節であるのは間違いない。この歌の作者志村正彦は四季の景物を織り込み、揺れ動く心を綴った。彼の歌詞のような作品が現代の若者にとってのリアルな「詩」ではないかと考え、五年間授業を試みた。志村の言葉は生徒に深く作用し言葉を紡ぎ出す。教室が自由で活発な場になり、私にとって生徒中心の授業へ転換する契機ともなった。

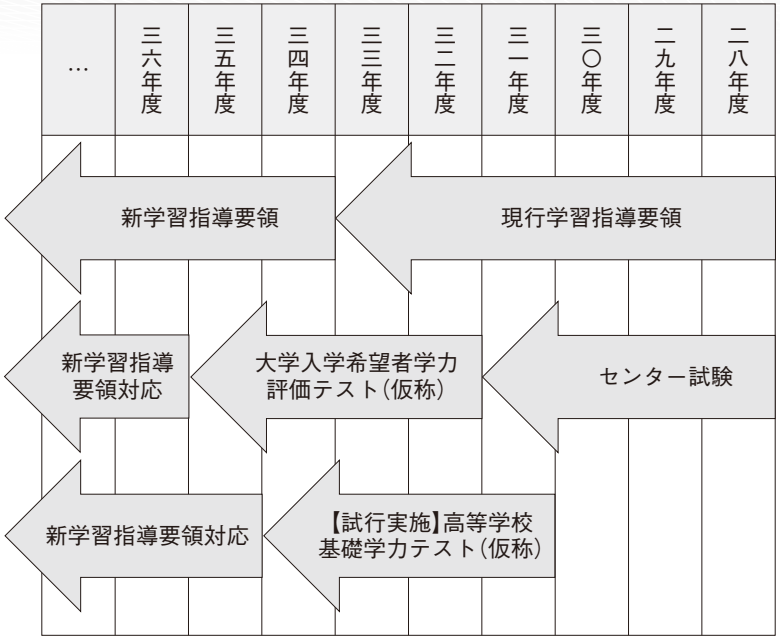
本書の実践はその試みをさらに前へ進め、複数の教材を横断的に読み多様な視点を持つことで、桜という言語文化的な主題の考察を深めることを目標にした。思考と表現の方法を習得し、それを活用することを学びの過程に位置付けた。対比とその統合という三項関係による思考の構造化は汎用性が高く、様々な単元で活用できる。

複雑な時代を生きる高校生は、自己と社会の課題を考え、他者と交流する力を身に付けねばならない。そのための根幹の教科に国語は再構築されつつある。転換期の今、新しい理論と実践の一助となることを本書はめざしている。私自身も深く学び取りたい。そして本書を通じて、「高校国語」という課題そのものを探究するために、私たち現場の教師が語り合う場ができればよいと考えている。

＊「実践編⑤」執筆担当

【高校国語 今後の予定】

■学習指導要領・新テストスケジュール（予定）



■新学習指導要領における科目編成（案）

共通必履修科目（案）	
【現代の国語（仮称）】 実社会・実生活に生きて働く国語の能力を育成する科目 ○実社会・実生活における言語による諸活動に必要な国語の能力の育成 ○例えば、 ・目的に応じて多様な資料を収集・解釈し、根拠に基づいて論述する活動 ・文学作品等を読んで、構成や展開、優れた表現などの効果について言葉の意味や働きに着目して批評する活動 ・根拠を持って議論し互いの立場や意見を認めながら集団としての結論をまとめる活動等の重視	【言語文化（仮称）】 上代（万葉集の歌が詠まれた時代）から近現代につながる我が国の言語文化への理解を深める科目 ○我が国の伝統や文化が育んできた言語文化を理解し、これを継承していく一員として、自身の言語による諸活動に生かす能力の育成 ○古典（古文・漢文）だけでなく、古典に関わる近現代の文章を通じて、言語文化を、言葉の働きや役割に着目しながら社会や自分との関わりの中で生かすことのできる能力の育成

選択科目（案）			
【論理国語（仮称）】 多様な文章等を多角的・多面的に理解し、創造的に思考して自分の考えを形成し、論理的に表現する能力を育成する科目 （主として、創造的・論理的思考の側面から「思考力・判断力・表現力等」を育成）	【文学国語（仮称）】 小説、随筆、詩歌、脚本等に描かれた人物の心情や情景、表現の仕方等を読み味わい評価するとともに、それらの創作に関わる能力を育成する科目 （主として、感性・情緒の側面から「思考力・判断力・表現力等」を育成）	【国語表現（仮称）】 表現の特徴や効果を理解した上で、自分の思いや考えをまとめ、適切かつ効果的に表現して他者と伝え合う能力を育成する科目 （主として、他者とのコミュニケーションの側面から「思考力・判断力・表現力等」を育成）	【古典探究（仮称）】 古典を主体的に読み深めることを通して、自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究する科目 （ジャンルとしての古典を学習対象として「思考力・判断力・表現力等」を総合的に育成）

『変わる！ 高校国語の新しい理論と実践―「資質・能力」の確実な育成をめざして』

大滝一登・幸田国広 編著

A5判・並製・二三四ページ・定価＝本体二二〇〇円＋税

「理論編」、「実践編」、「資料編」、座談会……
新時代に向かう高校国語の最先端がここに！

【理論編】

理論編①

変革期の高校国語科教育を展望する

キーワード 次期学習指導要領／資質・能力／高校国語新科目

文部科学省教科調査官 大滝一登

1 新しい時代に向けた学習指導要領の方向性

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会は、平成28年8月26日に「次期学習指導要領等に向けたこれまでの審議のまとめ」（以下「審議まとめ」という）を公表した。

審議まとめでは、学習指導要領の改訂について、「グローバル化の進展や人工知能（AI）の飛躍的な変化など、社会の加速度的な変化を受け止め、将来の予測が難しい社会の中でも、伝統や文化に立脚した広い視野を持ち、志高く未来を創り出していくために必要な資質・能力を子供たち一人一人に確実に育む学校教育の実現を目指す」ためとし、「“よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創る”という目標を学校と社会が共有し、連携・協働しながら、新しい時代に求められる資質・能力を子供たちに育む『社会に開かれた教育課程』を実現」するとしている。

また、「子供たちの現状と課題を踏まえつつ、人間が学ぶことの本質的な意義や強みを改めて捉え直し、一人一人の学びを後押しできるよう、これまで改訂の中心であった『何を学ぶか』という指導内容の見直しにとどまらず、『どのように学ぶか』『何ができるようになるか』までを見据えて学習指導要領等を改善」するとし、「生きる力」とは何かを

①生きて働く「知識・技能」の習得

②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成

③学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養

の三つの柱に沿って具体化し、そのために必要な教育課程の枠組みを再整理するとしている。

さらに、「子供たちが『どのように学ぶか』に着目して、学びの質を高め

010

次期学習指導要領、アクティブ・ラーニング、高大接続……最新の理論を５本収録！

【理論編】目次

①変革期の高校国語科教育を展望する（大滝一登）
②「資質・能力の育成」をめざす高校国語科の学習指導（幸田国広）
③新しい教育評価（髙木展郎）
④「言語文化」の学び方（藤森裕治）
⑤高大接続の改革とその背景（島田康行）

【実践編】

授業指導者による、実践授業の特徴の分析・評価・解説。

この実践ここがポイント❗

■授業の解説

「高等学校学習指導要領解説国語編」では、「現代…いて、「近代以降の文章を的確に理解する能力を高め…に表現する能力を高めることを新たに明示して、共…総合」の総合的な言語能力を育成する科目としての…明確にした。」と述べられている。つまり、「現代文…を中心としながら、話す・聞く能力や書く能力につ…められている。本実践では、このことを踏まえ、読…ることの多い「現代文B」において、あえて書く能…元としている点が特徴的である。また、本実践で育…を収集、分析して資料などを作成し、**考えを効果的**…これは、学習指導要領の指導事項の、「エ　目的や…様々な情報を分析、整理して資料を作成し、自分の…こと。」に基づいている。

本実践は、配当時間が４という少ない時数で構成…るが、第１次から第３次までの全てで、PISA型「…セスを伴っている。PISA型「読解力」は、自らの…識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するた…を理解し、利用し、熟考する能力と定義されている…解力」の育成には、文章のような連続型テキスト、…キストから、「情報を取り出し、解釈し、熟考・評…観点を設定している。本実践では、学習者から出さ…として、①そこに書かれた情報の取り出しだけでな…解釈・熟考を含んでいる点 ❗ポイント1 ▶p.099、②…テキストに基づいて自分の意見を論じたりするなど…❗ポイント2 ▶p.099、③テキストの内容だけでなく、…評価すべき対象となっている点が ❗ポイント3 ▶p.100、PISA型「読解力」…**育成のためのプロセスの特徴**を有していると考えられる。

106

第３次（４時限目）

◉指導目標

1　創作を経験し、互いに評価を行うことで創作に対する理解を深める。

◉本時の展開

1　創作物を交換し、互いに評価する。

2　全体のまとめを行う。

指導の留意点▶ 他人に対する評価と、それを踏まえての学習のまとめを行うために、全員が「作品を評価する」という活動を行えるよう、机間指導によって適宜アドバイスをする。

◉指導の実際

1　**創作物を交換し、互いに評価する。**

教師　前時に書いた作品をお互いに評価しよう。

３色のポストイットを配布し、評価方法について注意を行った。

〈評価について〉

・良い点は【赤】

・改善すればもっと良くなると思う点は【青】

・質問疑問は【黄】

・できるだけ具体的に示す。

評価しない、ということは一番冷たいことであると伝え、読んだ作品について必ず評価することを意識させた。ワークブックに「他人の作品を評価できた」という評価基準があることも確認し、積極的に評価することを促した。

５分程度を目途として、次々と作品を評価していった。教師は机間指導を行い、それぞれの生徒が評価を行えるよう、助言を行った。生徒は興味を持って他者の作品を読み、評価も積極的に行えていた。特に「表現」に関して多くの感想・質問を持っているようであった。❗ポイント3 ▶p.106 順次交換しながら読んでいくことで、原稿用紙に３色のポストイットが多数貼られていった。

教師　自分の作品に対しての評価を確認しよう。

100

指導のポイントには❗ポイントを付し、「この実践ここがポイント❗」の解説部分と相互リンクした。

実際に行われた優れた授業実践を１０本収録！

【実践編】目次

①分かりやすい話し方入門 ―我が校の魅力を中学生に紹介する―
②想像力を広げて物語を創ろう ―ポストイットを用いたショートストーリー作り―
③異論・反論を想定した小論文の書き方 ―学習者同士の交流・相互評価を通して―
④相手を意識した説明文の作成 ―グループワークで発見する方法―
⑤思考の仕方を捉え、文化を深く考察する ―随筆、歌詞、評論を関連付けて読む―
⑥小説の読み方の自覚を深める ―「檸檬」から一人称小説へ―
⑦漢文をシナリオに書き換える ―協働学習と朗読劇―
⑧和歌から物語を復元する ―個別学習とグループ学習の往還―
⑨日本の感性をたどる ―古典と近代以降の関連した文章をつなげて読む―
⑩「問題な日本語」ハンティング ―なぜ「問題」なのかをプレゼンテーションする―

すべての教科の言語活動を総合する

中井（なかい） 浩一（こういち）

国語専門塾鶏鳴学園塾長。国語教育、作文教育の研究を独自に続ける傍ら、九〇年代から進められている教育改革の批評活動をしている。

高校現場は、今、アクティブ・ラーニングへの対応で大忙しのようだ。しかし、本来は現行の学習指導要領の深化、充実が求められているだけだと思う。

現行の学習指導要領には画期的な点がある。①全教科での言語活動を求め、②その中心に国語科を位置付け、③高校生の体験、現場調査（フィールドワーク）を重視したことだ。

これを正面から受け止めるならば、それは「国語科」にとって衝撃的なことになったはずだ。なぜなら、この学習指導要領は、①全教科に、体験学習や現場調査（フィールドワーク）の指導を求め、②全教科に、教科学習と現場学習の統一的指導が求められ、③全教科が同じ課題を共有することで従来の教科の壁を壊した横の連携を求め、④「国語科」がそれを指導することを求めることで、国語科とは何か、他教科と何が違うのかが初めて、真っ正面から問題にされたからだ。（私が学習指導要領を取り上げるのは、それが正しい問題提起になっている限りでのことだ）

これまでの国語科とは、言語の学習を行なう教科であり、言語活動とは国語科の仕事に他ならなかった。したがって、他教科がすべて言語活動をすることになれば、国語科の独自性は失われ、他教科との関係が改めて問題になるだろう。

たとえば、レポートの書き方一つ取っても、問題があるのではないか。従来からすでに理科や社会の一部の教師たちによって、体験学習や現場調査に基づくレポートが指導されてきた。他方で、国語科の一部の教師たちによって聞き書きや報告文などが指導されてきた。しかし、それらはバラバラに、相互に無関係に行われてきたのではないか。理科や社会のレポートと国語科の表現とはどう関係しているのか、関係すべきなのか。これに明確に答えられる人がいるのだろうか。

ある国語科の先生はこう語る。「調査結果をレポートすることが目的ならば、調査の方法や、調査内容の客観性・資料的価値といったことが重要になる。それでは社会科になってしまう。ところが、詩という文学の形式ならば、その人がこう語ったということがあればいい、事実でなくとも思いが表現されていればいい。さらに、生徒の主観的な思いを書き込むことも許される」。つまり、事実や客観性重視が社会科、「思い」や生徒の主体性重視が国語科だ、というのだ。読者のみなさんはどう考えるだろうか。

多くの人は、国語科と他教科との関係を【表一】のように考えているのではないか。

【表一】

	対象	認識・表現の方法
国語科	人間の内面や心情	感性的に主観的にとらえ、感性に訴える表現をする
他教科	現実や事実	客観的に合理的、論理的に考え、論理的に書く

【表二】

	対象（役割）	認識・表現の方法
国語科	各専門分野の総合	全教科で学んだことを総合的にとらえる思考力と言語力
他教科	専門分野	それぞれの分野における基礎知識と考え方

他教科は現実を事実に即して合理的、論理的に考えるもので、国語科は人間の内面や心情を、感性的にとらえるものである。だから国語科は現実や事実の表現でも、読者の心に訴えるような文学的な表現をめざす、と。ここにあるのは、事実と心情との分裂、論理と感性との分裂である。本当にそうした理解でよいのだろうか。

各教科では、それぞれの分野における基本的知識や考え方を学ぶ。しかしそれだけではバラバラの知識や言語活動に終わりかねない。それらを総合するのが本来の国語科ではないか。各教科で学んだことを材料として、高校生一人一人の問題意識やテーマを作る、そのための方法と能力を学ぶのが国語科だろう。（【表二】を参照）

事実と心情、論理と感性、主観と客観、自己と他者。これらはこれまで分裂したままに放置されてきた。それらを総合してまとめ上げることこそが、本来の国語科の役割なのである。国語科が読解や表現を担当するということは、すべての教科の前提となる能力を担うという意味であると同時に、それらを総合して、一人の自立した人間を作るところまでを使命とするという意味である。それは最初から最後まで総合的なものであるべきなのだ。

先に提起したレポートの書き方の問題でも、これまでの理科や社会科と国語科の分裂といった状況を超えて、レポートのあり方の全体像を示すのが、本来の国語科の使命である。その文章の目的からして、どのような構成で、どのような文体をどのように使い分けて書くべきか。それを指導することが求められている。

最後に一言。国語科の教師の中には「では、感性や心情、文学の教育はどこにいくのか」と心配する方々がいるだろう。それに答えておく。そうした「せまい意味」での文学や心情的な教育は、「文学」という選択科目として位置付けるのが妥当ではないか。音楽や美術と同じである。

なお、本稿の論点を、聞き書き（調査・取材したことをもとにまとめる文章）やレポートの指導に即して、詳しく述べたのが今年六月に刊行された『「聞き書き」の力――表現指導の理論と実践』（大修館書店）である。是非参考にしていただきたい。

『日本語シソーラス―類語検索辞典 第2版』刊行記念

編者 山口 翼（たすく）が語る
『日本語シソーラス』編纂の四十六年

一九四三年千葉県生まれ。一九六二年慶應義塾大学入学。一九六六年スタンフォード大学卒業（統計学部・確率論）。一九六七年慶應義塾大学卒業（商学部・計量経済学）。一九六九年慶應義塾大学大学院中退（経営工学）。一九七〇年渡仏。日本ペンクラブ会員、日本文藝家協会会員。

◆アメリカでシソーラスと出会う

慶應義塾大学在学中の一九六四年に、計量経済学を学ぼうと、アメリカのスタンフォード大学に留学しました。最初の秋学期に大学での「学び方入門」の講義があり、英語で文章を書くときの道具として『ロジェのシソーラス』（Roget's Thesaurus）が紹介されました。それがシソーラスを知った最初だったと思います。

自分で使うようになったのは次の冬学期です。新入生必修の2科目で2週間に計2本英語でペーパーを書かなければならなくなって、図書館に閉じこもりきりになりました。そのときに適切な言葉を探すためにロジェを使うようになりました。

スタンフォードでは2年目に統計学部に移り、一九六六年に卒業しました。帰国して、翌年、慶應の商学部を卒業し、工学系経営工学の大学院へ進んだのですが、日本の大学・大学院の状況にカルチャーショックを受け、しだいに文学を志すようになりました。

ちょうどそのころ、スタンフォードで知り合ったリシャール・ゲッジ（Gedji）氏が、研究員として東京にいたので、相談しました。初めに米国を見たのでこんどは「旧世界」を見たいと思って、ゲッジ氏の世話で一九七〇年にフランスへ渡りました。

◆シソーラスの仕事はフランスで開始

パリの下宿で小説を書こうとしたんですが、いきなりまともなものは書けません。そこで考えたのは、良い文章を書くためには、語彙を豊かにし、対象を正確に捉える言葉とその使い方を学ばなければならないのではないか、ということでした。そこで思い出したのが、スタンフォードで使った『ロジェのシソーラス』です。文章を書く準備として、まずはロジェのような日本語のシソーラスを作り、次いで近現代の作家の全集から文例の採集をするという仕事を4年ほどで行う計画を立てました。

日本の最初のシソーラスの試みは国立国語研究所編『分類語彙表』（一九六四）です。私がこれを知ったのは慶應の大学院のころでした。『分類語彙表』の収録語数は3万2千あまりで、分類の繰り返し（一つの語句を複数の語群に重複して載せる）は非常に少ない。これに対してロジェは、延べ語数32万あまりで、一つの語句が多くの語群に繰り返し載せてあります。

それで最初は、『広辞苑』（初版）の見出し語を参照して、『分類語彙表』の収録語句を15万語にふくらますことにしました。しかしやってみると、15万語を語義ごとに複数の語群に分類して手書きで書いていくには数年かかることがわかったので、やり方を変えて『広辞苑』からまず4～5万の基礎語を選び出して、五十音順にノートに書いていくことにしました。後でそこに分類先の語群番号を書き込んだものが、『日本語シソーラス』の「索引」の原型になりました。

◆ノート上での分類作業

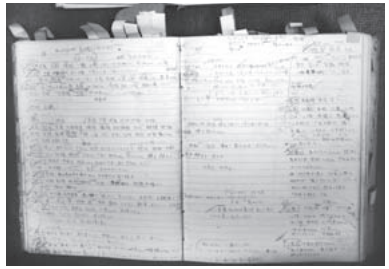
語句をどう分類するかということですが、『分類語彙表』は「体・様・相」という独自の分類です。これをロジェ式の分類体系にしようと、『分類語彙表』とロジェ（当時4版）を相手に約1年格闘しました。しかし、満足できる分類体系はできなくて疲れ果て、パニック発作を起こして入院する羽目になりました。

その後気を取り直して、こんどは森鷗外、志賀直哉、谷崎潤一郎などを読んで、多彩な語句の引用例や名文を採取する作業を始めました。これは打って変わって楽しい作業でした。

一九七一年九月、パリを離れて友人が見つけてくれたブルターニュの寒村の家に移って、シソーラスの作業を再開しました。暫定の分類体系表（写真左）を作成して机の前に貼り、これを見ながら、ノートの各語群番号のページに、『広辞苑』の見出し語（主に上述の基礎語以外）を書いていったんです。

語義がたくさんあると最初は1語の処理に十何分もかかりましたが、前の時と違って、しばらくするとこれが秒単位でできるようになり、この作業は7か月ほどで終わりました。次いで、『大言海』『岩波古語辞典』の見出し語から、『広辞苑』にないものを拾いました。これが、日本語シソーラス本体の原型になりました。

このノートが傷んできたので製本に出したんですが、その時にページの端を切り落とされて、余白への書き込みの一部がなくなってしまうという事件がありました（写真左）。



◆ノートからカードへ

その後、ノートのままでは扱いにくいので、カードに書き写す作業を始めたのですが、これには膨大な時間がかかることがわかって、途中で中止しました。このころはいろいろのことがうまくいかず、苦しい時代でした。

一九八〇年に、フランス北部のコンピーニュに転居しました。そこでコピー機を買い、ノートやカードを2年がかりでコピーしました。さらに、戦前の『大辭典』（平凡社）の見出し語、『日本類語大辭典』の語句、および鷗外、荷風、漱石など16人ほどの作家の全集から新しく収集した語句・文例を、カードにしました。

その後、文学に戻って小説を書いた時期もあり、シソーラスの仕事は何度も中断しましたが、一九八〇年代後半でしょうか、ノートとカードの形で、日本語シソーラスの中身がだいたいできあがりました。

一九九一年に父が死去したこともあって、翌年帰国し、家業に携わりました。

◆初版『日本語大シソーラス』の出版

一九九六年ごろ、大修館書店との間で出版の話がまとまりました。手伝いの人を募集してチームを作り、ノートとカードに書かれたシソーラスの中身をパソコンに入力し、原稿データの形にまとめていく作業をしました。この途中にも、語群の統合や分割・移動など分類体系の手直しが続きました。この原稿のまとめの作業は、結局6年かかりました。

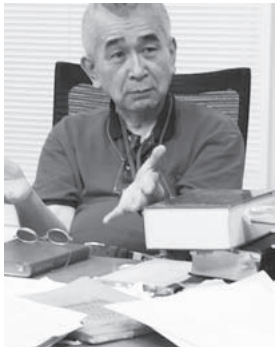
あるとき手伝いの人の一人が、「どんな言葉にも分類する語群があるんですね」と感嘆して言ったんですが、それはある意味で当然なんです。後で初版の書評の中の言葉にあったように、なにしろ「シソーラスは世界観」なのですから。

こうしてできた原稿データを印刷所に渡して、書籍のための組版をしました。シソーラスには実に多様な表記が登場するので、印刷所では膨大な数の「外字」（組版用の文字盤にない字）を新たに作らなければならなりませんでした。さらに、本のページの4割以上を占める索引の作成にも、試行錯誤が必要でした。

初版『日本語大シソーラス』は二〇〇三年九月に刊行されました。この年、母が入院し、七月に亡くなったために、最後の校正等の仕上げの作業は自分ではできなくて、少し悔いが残る結果となりました。

◆13年後の第2版

「第2版序」に書きましたが、二〇〇五年ごろからようやく改訂のことを考え始めました。当初は小規模な手直しにしようかと思ったのですが、いろいろやりたいことが増えて、『日本語シソーラス 第2版』の刊行は初版から13年後の二〇一六年五月になりました。



編者 山口翼氏

ロジェのシソーラスは、クロスワードパズルなどのために、改訂のたびに固有名詞や専門語をどんどん増やしていきました。この影響もあって、初版では、各種専門用語辞典などを参考に、専門語をかなり入れました。特に医学用語は多くなっています。第2版ではこのへんを少し整理して、シソーラス本来の姿に近づけました。（ただし、紙幅の制約のない電子版では、そのかなりの部分を復活させる予定です。）

第2版でもっとも力を注いだのは、季語・歌語の増強です。初版シソーラスはカシオとシャープの携帯用の電子辞書に収録されまして、常に言葉探しをしている俳句・短歌の作者に特に好評なんですが、第2版ではこの点をさらに強化しようということで、大小の歳時記、季語・歌語についての資料を参照して、より多くの季語、歌語、および枕詞、関連する古語を収集・分類しました。

私のシソーラスでは、歳時記と同じく季語を季節ごとに集めた語群のほかに、意味によってまとめられた語群にも季語が収録されていて、多様な方向から検索することができます。第2版では季語が多く含まれている語群には「歳時記語群」であることを示す【歳】という印をつけました。

私は二〇一〇年ごろから鬱病に苦しめられたのですが、この季語関係の作業でなんとかしのぐことができました。

私のシソーラスの「0483 こそあど」「0484 関係詞的表現」「0486 文末表現」およびそれに続く「0486 累加（接続）」以下の語群は、初版からある語群なんですが、ロジェを初めとする各種シソーラスにはない私の独自の語群です。日本語に特徴的な表現が集めてありますので、文章を書くときに役立てていただけるものと思っています。

（本稿は、山口翼氏へのインタビューをもとに編集部でまとめたものです。）

「共同・協同・協働」

金子 守
元筑波大学大学院教授

「共同」と「協同」の語は、ほとんどの国語辞典に収められているが、「協働」の語を収めていない辞書も少なからずある。

『日本国語大辞典』（第二版、二〇〇一）には、「協働」もあり、『いろは引現代語大辞典』（一九三）にあること、鈴木利貞編『学生と教養』（一九三六）の中で倉田百三が「社会連帯の生活の中に、出来るだけ他と協働する生活を……」と使った例が引かれている。

『大辞典』の初版（一九三五）には、

［協働］cooperation　同一目的のために二人以上の人が協力すること。単純協同と複雑協同とあり。

とあるが、用例は示されていない。この語釈からすると、「協同」とあまり変わりないように思われるが、ともかく、この語が昭和の初めごろすでに存在していたことは確かである。

『現代用語の基礎知識』（二〇〇七）によると、「協働」の語は、一九九〇年代半ばから使用頻度が増えてきた、ということである。

『明鏡国語辞典』の初版（二〇〇一）には、「協働」の語は収載されていなかったが、第二版（二〇一〇）には、「両国の協働による事業」を例に、「同じ目的のために協力して働くこと」と意味が示されている。

それでは、「共同事業」「協同事業」「協働による事業」の異同やニュアンス等の違いはどこにあるのか。この三語の用例や、特に「協働」が二〇一〇年代前後より国からの教育情報に頻繁に使われている背景を考えてみる必要があるように思われる。

その前に、出版されている国語辞典を参考に、三語の意味・用法をまとめてみる。

【共同】二人以上の人が一つのものを一緒に利用したり、一つのものに同じ資格・立場で関わること。「―で使う」「―作業」「―で研究する」「―声明」

【協同】二人以上の人や団体が、同じ目的を達成するため、あるいは共通の利益を守るために、心や力を合わせ、助け合って仕事をすること。「産学―」「農業―組合・生活―組合」

【協働】一つの目的のために、言語や文化、専門分野などが異なる多様な他者が、対等な立場で補完・協力しあうこと。

「協同」は、「協」の字義から、「共同」よりも一緒に力を合わせて協力する意味合いが強いように感じられる。また、用例の熟語から「同じ目的の達成」「共通の利益を守る」ことなどを加えることで、「協同」の用法がよくわかる。この語には、「産学協同」に見られるように、業界と研究者それぞれ、役割分担が決まっているようなニュアンスがある。

「協働」の語には、他の二語と違って、「協働○○」「○○協働」という熟語の例が、今のところ、あまり見られない。

「協同」も「協働」も一つの目的に向かって心や力を合わせて物事を行うことでは同じだが、「協働」が使われる背景には、知識基盤社会化による専門領域の細分化、テクノロジーの進化とイノベーションの創出、あるいはグローバル化に対応して、ますます「主体性・多様性・協働性」が求められる時代が到来しつつあり、自立した人間として、文明や文化などの異なる多様な他者と心を一つにし、同じ目的に向かって、得意分野・専門分野などで協力して行動し、創造的な価値を生み出すことが強く意識されるようになったことがあるように思われる。

「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的な改革について」（二〇一四、中央教育審議会答申）やそれ以降の学習指導要領の改訂に関わる審議中の文言の中に、例えば、「他者と協働しながら新しい価値を創造し」「主体的・協働的に学ぶ学習（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）の充実」など「協働」の語が頻出する。流動化し、解の見えない不透明な社会を生きるためには、初中教育の段階から課題の発見や解決に向けて、主体的・対話的（協働的）な、深い学びの方法を身に付ける必要性を説く行政が発信したことばが「協働」と言えるだろう。

投稿

教材研究

「身分」と「にきび」から読み解く「羅生門」

佐藤　功
埼玉県立所沢高等学校

◆「近代の小説」とはなにか？

封建制社会（身分制度）において、自分の人生は生まれた時から明らかであった。百姓の子は百姓、大工の子は大工であり、同じ村の中のお節介なおばさんが結婚の世話もしてくれた。親の姿を見れば自分の人生は分かるし、そのことに疑問を感じることさえなく、安心して日々暮らしていけばよいのだった。百姓は、大工の人生になど興味はなかった。そこで求められた文学は、娯楽であった。人々は、不思議な物語、おもしろい物語、つまりはファンタジーを読んで、いっとき日常を忘れて楽しめればよかったのだ。

ところが、近代になると身分制度は崩壊し、我々は自由になった。身分に縛られることなく自分で生き方を決められる。逆に言えば、自分の人生は自分で切り拓かなければならない。だから人々は、他人の人生を知りたくなったのである。どんな生き方があるのか。悩んでいるのは自分だけなのか。

そこで、誕生したのが、「小説」である。小説とは、主人公が、読者にとって、人生のモデル（反面教師を含む）になるものでなければならない。「この人の悩みは、自分の悩みと同じだ」と思えること、すなわち、感情移入できることが必要なのである。たとえば、白雪姫や桃太郎に感情移入できるだろうか。

◆主人公の男は何者か？

平安末期の社会秩序が崩れてしまっている京を舞台とするこの作品の主人公は、「下人」と称される。しかし、彼は実は下人ではない。主人から暇を出され「下人ではなくなった男」である。彼は、明日からどうやって食べていこうかと途方に暮れて、羅生門の下で雨宿りをしているのだ。

主人から暇を出されたというのは、単に職を失ったということではない。ここで注意すべきは、下人とは、職業ではなく【身分】だという点である。身分制度からの解放とは、初めから近代に生きる我々が考えるような、無条件で喜ばしい出来事ではありえない。つまりこの男は、下人といういわば奴隷のような身分から解放され自由になったおかげで、生きるすべを失い、途方に暮れているのである。

繰り返すが、このとき主人公の男はもはや下人ではない。作品中では最後まで下人と称されるが、彼は下人でなくなったがゆえに、いかに生きるか、途方に暮れてしまったのである。

男はこのとき、生きるためには盗人になるしかないと思いながらも、それを「積極的に肯定するだけの勇気が出ずにいた」。

そこで彼は、とりあえず羅生門の上層に登って夜を明かそうと梯子に足をかける。テレビドラマなら、ここでCMが入るところである。

「それから、何分かの後」、つまりCM明けは、梯子の中段で一人の男が「息を殺しながら、上の様子をうかがっている」というシーンからスタートする。この人影はいったい何者か？　実に見事な演出である。

この場面では、はじめ誰だか分からないこの男が、右の頬にある【にきび】によって、先ほどの「元下人」だということが明かされる。

この記述の意味するところは何か。身分から解放され自由になった男は、もはや何者でもない。【にきび】が無ければ誰だか分からない。【にきび】によってのみ、彼は固有の存在として識別される。

◆正義感の正体

男は、羅生門の上で、死体から髪の毛を抜くという罰当たりな行為を目撃し、「あらゆる悪に対する反感」を燃え上がらせ、老婆を捕える。

しかし、語り手の言う通り、「下人には、もちろん、なぜ老婆が死人の髪の毛を抜くかわからなかった」。だから、「それを善悪のいずれに片づけてよいか」も分からない。もしかしたら、老婆は、娘の形見にするために死体から髪を持ち帰ろうとしていたのかもしれないのだから。

となれば、この男の行動は、いわゆる正義感によるものとは言えまい。このとき男が反感を持ったのは、「猿のような老婆」が髪を抜いていたからであり、「この雨の夜に、この羅生門の上で」だったからである。老婆の風体、季節や天候、時刻や場所の不気味さが、男の心に「少なからず影響した」のだ。雨が、彼のセンチメンタリズムに影響し、感傷的な気分にさせたように。

つまり、この男は雰囲気に流されただけなのである。さらに言うなら、明日からの生活をどうすることもできずに、彼はイライラしていただけなのである。それが証拠に、「下人は、さっきまで、自分が、盗人になる気でいたことなぞは、とうに忘れている」。まったくいい気なものだ。

ただし、ここではっきりさせておきたいのは、【彼は特殊な人間ではない】ということである。私たち人間の心が、雰囲気に影響されるのは、誰にとっても、いつものことなのである。

◆アイデンティティ　主人公の男は何者か？再び

さて、男は老婆をねじ伏せ、圧倒的な優位に立った。その満足が男の態度を優しくさせる。

今まで「下人」として社会の最下層で生きてきた男が、生まれて初めて「人を見下した」瞬間である。生まれて初めて人の上

に立ったのである。「悪いヤツを捕まえた、俺もやるもんだ、自分は意味のある人間だ……。」このとき彼は、身分というお仕着せの社会的な位置付けとは別のアイデンティティ（自分の居場所）を獲得した。にきび以外にも、彼を固有の存在として「その他大勢」から切り離してくれるものを手に入れたのである。

さあ、俺が捕まえたこの老婆は、どれほど悪いヤツなのか？

しかし彼の期待は見事に裏切られる。

かつらを作って売るための行為。「なんだそんなことか。」男はがっかりする。自分はどれほどの悪を退治した英雄なのだろうかと期待していたからだ。「くだらないマネしやがって、ふざけるな！」

やはり彼が老婆を捕えた動機は、いわゆる正義感ではなかった。「俺はどれほどスゴイ人間なのか？」身分という拠り所を失った彼が求めていたものは、自信であった。社会的な賞賛であった。「これが自分だ。他のヤツとは違うんだ」と胸を張って言える「自我の核」のようなものだったのである。

ところが老婆は、男の怒りを誤解して、彼に向かって言い訳を始める。「生きるためにはしかたがない」「生きるためなら許される」と釈明するのである。

そうして、老婆のその言葉には、彼女の意図と裏腹に、重大な落とし穴があった。誤解に基づくコミュニケーションもまた、我々人間にとっては、いつものことである。

◆主人公の勇気とは？

「生きるためなら許される」。老婆の言葉を聞いた男の心には「ある勇気」が生まれた。それはどんな勇気か。「盗人になる勇気」？　良くないことをする時、それを普通は「勇気」と呼ばない。では何と呼ぶべきか。たとえば「盗人になる覚悟」と呼ぶのがふさわしいだろう。

しかし、芥川は、あえて主人公の「覚悟」を「勇気」と呼んだ。結果、彼の決心は、一面において、良きものとして肯定的に表現される。単純な正義に照らして一方的に「盗人になるのは悪いこと」という表現にはならないのである。

男は、生きるためには「盗人になるよりほかにしかたがない」のだ。

では「盗人になる勇気」の前半「盗人になる」部分の方を、今度は「勇気」にふさわしく言い換えよう。

「生きる勇気」。「飢え死になど考えない勇気」。「何が何でも生きていこうとする勇気」。

ここで、思い出して欲しいのだが、下人がクビになったのはなぜだったか。彼が何か失敗したからではない。社会全体が不景気になったからである。それでも、泥棒になるくらいなら死んだほうがマシだというのは、確かに「正しい覚悟」なのかもしれない。しかし、芥川はそれを、盗人になる「勇気が出ずにいた」と、作品の冒頭で既に書いている……。

◆人生のモデル

もし、老婆の不道徳が許されるのなら、生きるすべを失ったこの男の不道徳もまた許されねばならない。

生きるためにやむを得ず弱者を踏みつける。その意味で「主人公の男と老婆との関係」は、「老婆と死体の女との関係」と、【相似形】をなす。小説の読解において、「関係の相似形」はきわめて重要だ。老婆は自分より弱い死体を踏み付けにした代わりに、自分より強い男に踏み付けにされることに、甘んじなくてはならない。

このとき、老婆の言葉は、途方に暮れていたこの男に対して、生きる指針を示すものとなった。

下人という身分を失い自由になった男は、自分の人生を自己責任で切り拓かなければならなくなり、どうしていいか分からず途方に暮れていた。そのために他人の生き方をモデルとして知りたかった。

そして、老婆は彼の手本となったのである。

もはや男は「にきび」に頼る必要がなくなった。「俺は、俺だ。何があっても生きていくのだ」。

彼は、まさに典型的な近代人として、普遍的な存在なのであり、我々読者の姿そのものなのである。自分はいったい何者なのか。自分の居場所はどこにあるのか。高校を卒業したらどうするか。どうやって収入を得て生きていくのか。強盗になるとは言わないまでも、死人から髪を抜いてカツラにして売るくらいのことは、多かれ少なかれ誰もがしている事ではないのか（例えば、一〇〇円ショップで売られている商品は誰がどんな給料で作ったものなのだろう…）。この悩みこそ、江戸時代には存在しない悩みであり、近代の青年に特有の悩みなのだ。

【生きる勇気】を手に入れた男は、老婆から着物を奪って「またたく間に急なはしごを夜の底へ駆け下り」ていったのである。

◆自由な社会に生きるということ

しかし、しかしである。身分制という秩序が崩壊し、人間が自由に生きられる近代とはどのような時代であるのか。言い換えれば、人間が、一人一人みんな自分のことを優先して、何が何でも生きていこうとする社会とは、どのような社会であるのか。

男は、真っ暗で洞穴のような夜の世界に消えていった。その後どうなったかは「だれも知らない」。若い女は死んでなお老婆に踏みつけにされ、老婆はこの男に踏みつけにされた。次は、彼が踏みつけられる番なのだろうか。

この最後の一文には、明らかに作者・芥川の狙いがある。少なくとも、主人公がこの後、何の苦労もない幸福な明るい人生をおくったと読むことは不可能だろう。

不自由だが自分の人生を全て見通せる安心な身分制社会は終わった。「自分の人生を自分で決められる自由」を手に入れた私たちは、そのかわり、「先の見えない不安な闇」を引き受けなければならない。もしかしたら、そこには身も蓋もない弱肉強食の世界が待ちかまえているのかもしれない。

男が勇気を持って駆け降りて行った世界とは、我々読者が住むこの現実の世界である。そこにあるのは、明るい希望だけでもないが、真っ暗な絶望だけでもない。第一、この社会を作っているのは、私たち自身である。生身の肉体を持つ私たち人間は、先の見えないリアルな現実の世界の中で、それでも勇気を持って生きなければならないのである。

大滝一登・幸田国広　編著

変わる！高校国語の新しい理論と実践
――「資質・能力」の確実な育成をめざして

A5判・並製・二二四頁
定価＝本体二二〇〇円＋税

評者＝木林雅之

アクティブ・ラーニング、資質・能力、新大学入試…。学習指導要領改訂や高大接続改革をめぐってさまざまなキーワードが飛び交う昨今。高校国語は一大転換期を迎えている。

しかし、この新しい高校国語を具体的にどのように捉えて、どのように指導していけばよいかは悩ましい問題である。

そんな悩みに応え、一つの指針を示したものが本書である。「理論編」では、次期学習指導要領のめざすものや、学習評価、大学入試などの最新情報を紹介・解説し、「実践編」では、新しい授業のあり方を、実際に行われた授業実践の形で示している。また、各実践には、授業指導者の解説記事「この授業ここがポイント！」が付されており、各授業の注目すべき点もわかりやすい。次期学習指導要領、新テスト関連のキーワード解説など「資料編」も充実している。

理論と実践の両面から、高校国語の最先端の姿に触れることができる本書は、これからの国語教育を考える上で、必読の書といえるだろう。

中井浩一・古宇田栄子　編著

「聞き書き」の力
――表現指導の理論と実践

A5判・並製・二九八頁
定価＝本体二五〇〇円＋税

評者＝田中宏幸
広島大学大学院教育学研究科教授

「聞き書き」は、インタビューによって聞き取った内容を再構成し記述していく総合的な表現活動である。だが、指導法が不明確であるために尻込みする人も多いであろう。

この状況を何とか改善したいと思われたなら、まず、本書に収められた一四編の生徒作品に目を通してほしい。生身の人間と出会い、人としての生き方や物事のありように対する理解を深め、問題の本質に深く迫っていく道筋が見事に語られている。自分の経験だけに頼ったり、借り物の論理を振り回したりする底の浅い小論文とは根本的に異なる文章である。

こうした文章はどうすれば生まれるのか。その実践方法と考え方をわかりやすく解説してくれているのが本書である。立花隆へのインタビューや、塩野米松との対談も読み応えがある。

「聞き書き」は、「主体的な学び／対話的な学び／深い学び」を実現させるのに最適な指導法である。この書を契機として、「聞き書き」に取り組む教員が増えることを心より祈る。

えつらん室
大修館書店の新刊紹介

時田昌瑞　著

思わず使ってみたくなる 知られざることわざ

四六判・並製・二一〇頁
定価＝一八〇〇円＋税

評者＝品川　樹

書名を見て、「え？ 知られていないことわざを知ってどうするの？」と思ったあなた。「知られざることわざ」も使いようですよ。例えば…。

失恋で落ち込んでいる高校生に、**「悲しみの一時（いっとき）は楽しみの一時より長し**だな、さぞつらかろう。だが、**茨（いばら）も花持つ**（逆境にも楽しいことはある）と言うし、**月日も変われば日も変わる**さ。**一度焼けた山は二度は焼けない**から大丈夫だよ。」と励ます。ただし、やりすぎると、**切った口は治せるが言った口は治らぬ**事態に陥るのでご用心。

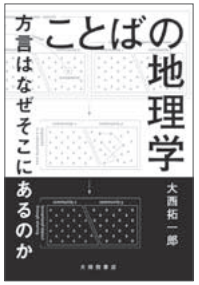
アクティブ・ラーニングばやりのご時世。**片手で錐（きり）はもめぬ**のだから、協働的学習、コラボレーションの大切さもわかる。だが、**大功を成すものは衆に諮らず**と、果断な行動力も時には必要だろう。**千羊（せんよう）は独虎（どっこ）を防ぐことあたわず**、なのだ。

とはいえ、**孔雀は羽ゆえに人に捕られる**（非出る杭は打たれる）のも一面の真実。混迷の時代、**根（ほぞ）を深くして蔕（へた）を固くする**（蔕＝果物のへた、基礎をしっかり固める）のが肝要か。

＊ゴシック体は本書収録のことわざ

大西拓一郎　著

ことばの地理学
――方言はなぜそこにあるのか



四六判・上製・二〇八頁
定価＝二二〇〇円＋税

評者＝大井　悟

「かたつむり」の方言分布は、中心（都）から周縁に向かって、デデムシ→マイマイ→カタツムリ→ツブリ→ナメクジという同心円を描く。柳田国男『蝸牛考』で有名なこの説に、著者は真っ向から反論する。「『かたつむり』の方言分布を三十年以上見ているが、私には一度として、言われるような同心円が見えたことがない」。

では、方言はどのように形成されるのか。その具体的事例が本書の根幹を成す。河川の交通が運んだ方言。経済活動と言葉の伝播の関係。土地の自然観や家族制度と敬語との関係。標高と動詞の活用変化。人口密度と言葉の変化。「行くだ」「行くずら」のような「田舎らしい方言」の成立過程…。

「方言はなぜそこにあるのか」。この究極の問いをめぐる謎解きは、驚くほど多彩、かつスリリングだ。方言の起源を探ることは、「人類や生物や宇宙を対象とする研究が、それぞれの起源を探究しているのと同じ」と筆者はいう。学問研究へのロマンをかき立てる一冊である。

新全訳古語辞典

大修館書店

2016年秋新刊

これからの古語辞典は

「読む辞典」から、「見てわかる辞典」へ。

確かな解説＋わかる図解＝完全理解！

- すべての用例に現代語訳を付けた**全訳タイプ**
- 古典学習・大学入試に必要十分な**約 17,500 語**を収録
- **ビジュアル化を追求**、古語への苦手意識をとりのぞく工夫満載
- ハンディで開きやすく、**機能的で斬新なブックデザイン**

B6 判・1232 ページ・2 色刷／定価＝本体 1800 円＋税

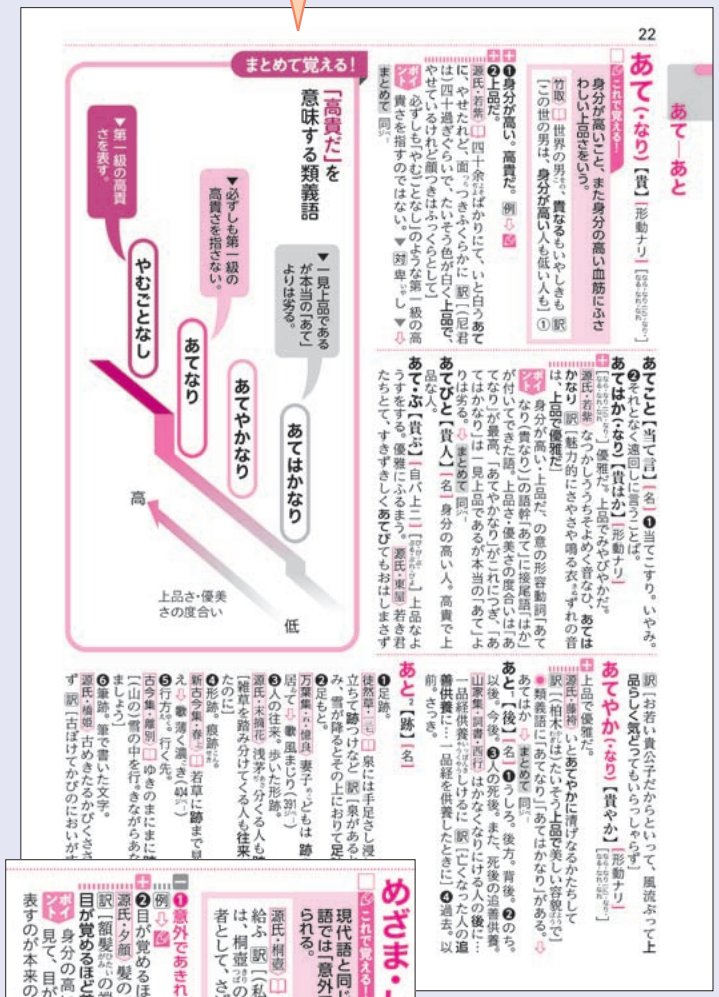
林　巨樹（青山学院大学名誉教授）
編者　安藤千鶴子（元都立小山台高等学校教諭）
編集委員　林　伸樹（神奈川大学附属中・高等学校教諭）

特色1

最重要語は「これで覚える！」「まとめて覚える！」

試験によく出る、現代では実感しにくい重要語

意味の似ている重要語がまとめて覚えられるコラム



覚えるべきポイントが端的にわかる

特色2

重要語には一目でわかるアイコン表示

貴族の生活、季節感をイメージで実感！

古典の世界を実感するアイコン

かんだちめ【上達部】［名］《かんだちべ》とも 図
大臣・大納言・中納言・参議および三位以上の上級の役人。「公卿」ともいう。

にょうご【女御】［名］《にょご》とも 図
天皇の妃。また、上皇・皇太子の妃をいうこともある。地位は「中宮」の下、「更衣」の上。平安時代初め、桓武天皇のときからこの名称が見える。

かけひ【懸け樋・筧】［名］ 図
庭などに水を引くため、地上にかけ渡した樋。中をくりぬいた木や、節を抜いた竹を用いる。

うちき【袿】［名］《うちぎ》とも 図
❶女性が上衣と肌着の間に着る、袖が広く丈の長い衣服。宮中の正装では、唐衣・表着・打ち衣の下に袿を五枚重ねて着ることから「五つ衣」という。普段は、上衣を着けずに平常着として用いた。⇩ 図 にょうばうしゃうぞく

ぢもく【除目】［名］ 図
大臣以外の官吏の任命式。春の「県召しの除目」は主として地方の役人を任命し、秋の「司召しの除目」は主として中央の役人を任命した。他に「臨時の除目」があった。

わかな【若菜】［名］ 図
❶春先に萌えでる、食用とする野草。季 新年

うぐひす【鶯】［名］ 図
うぐいす（鳥の名）。背は緑褐色で、美しい声で鳴く。「春告げ鳥」ともいう。季 春

ほととぎす【時鳥・杜鵑・郭公・子規】
一［名］ほととぎす（鳥の名）。初夏から秋にかけて日本各地に渡来し、山中の樹林に棲む。古くより夏の鳥として親しまれ、詩歌にも多く詠まれる。季 夏 ⇩ 句 野を横に（411パ）・句 ほととぎす大竹藪を（414パ）・句 松嶋や（415パ）・句 ほととぎす平安城を（417パ）

あまのがは【天の川・天の河】［名］ 図
奥の細道・越後路 □ 荒海や佐渡に横たふ天の川 ⇩ 句 411パ
◉牽牛星と織女星とが年に一度この川を渡って会うという七夕伝説は有名。

古典の季節を実感するアイコン

あじろ【網代】［名］ 図
❶冬、川の瀬に杭を立て並べ、その間に竹や木を編んで魚が通れないようにし、せばめた出口に簀をつけて氷魚（＝鮎の稚魚）を捕るしかけ。宇治川のものが名高い。季 冬
枕草子・すさまじきもの □ すさまじきもの。昼ほゆる犬、春の網代。訳［興ざめするもの。昼間ほえる犬、春になっても残っている、氷魚を捕るしかけ］

ほかにもこんなアイコンが！

重要語	季語・季節	人物・事物
敬語	冬	人物（男性貴族）
助詞	秋	人物（女性）
助動詞	夏	人物（一般）
掛詞	春	人物（僧）
古今異義語	正月	住まい
	時間と方位	装束
	信仰	武装
	行事	行事

特色 3

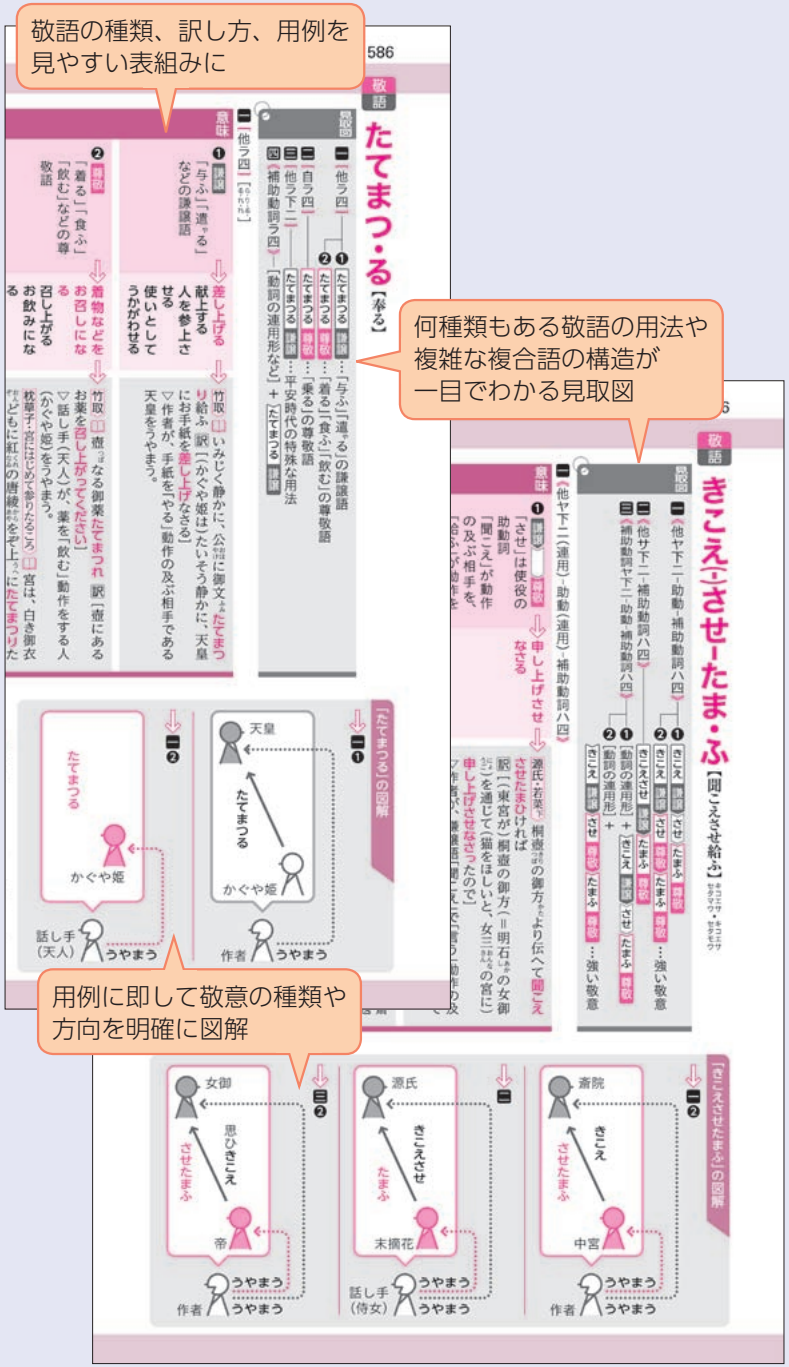
生徒の苦手な「文法」。でも、これなしに古典は読めない…

助詞・助動詞は「接続」「活用」「意味」「識別」を一目で把握

特色 4

生徒の苦手な「敬語」。でも、これなしに古典は読めない…

敬語は「見取図」で全体を把握、「図解」で敬意をつかむ



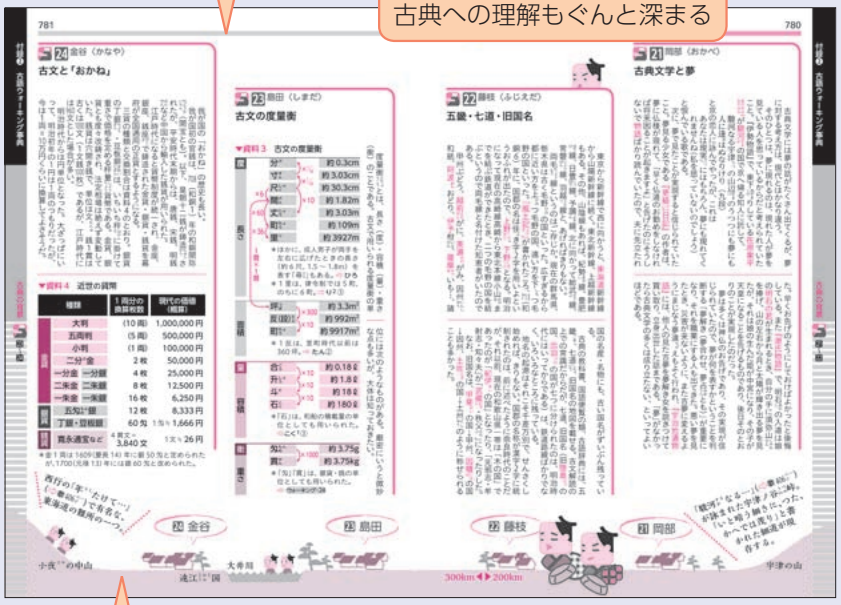
特色 6

どんどん読みたくなる「弥次・喜多と歩く 古語ウォーキング事典」

わざわざ引いてまで読まなかった、これまでの古語辞典のコラムも…

古典を読むのに役立つ53のコラムを東海道の宿場順に並べた、旅するコラム事典

読んだコラムに☑を入れてマップが完成する頃には、古典への理解もぐんと深まる



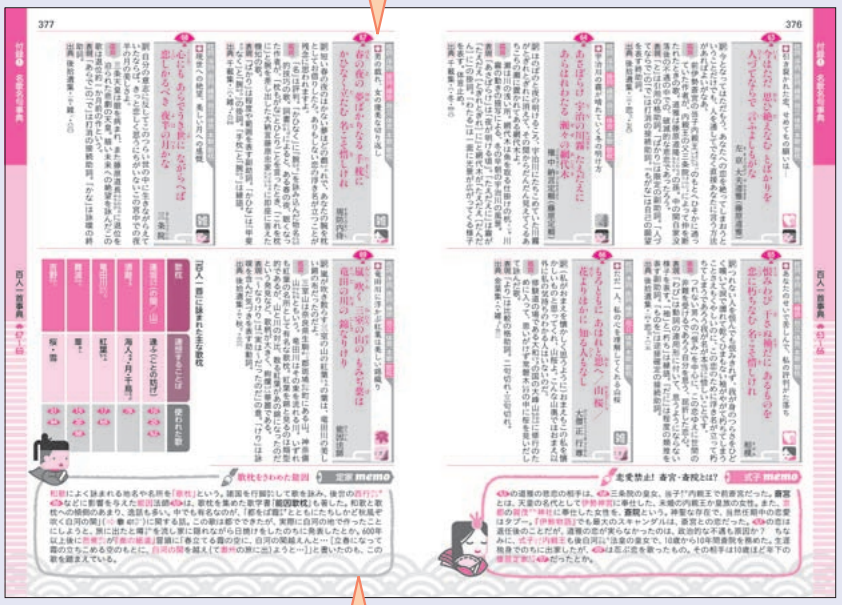
道中の古典文学スポットや役立つ資料も豊富に掲載。アクティブ・ラーニングにも使える

特色 5

和歌がわかる！「百人一首事典」

苦手な生徒が多い「和歌」。入試でも正答率がガクンと落ちる…

作者・部立て、用いられている修辞も一目でわかるアイコンに

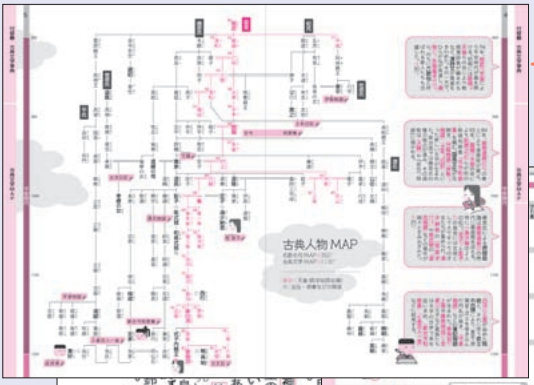


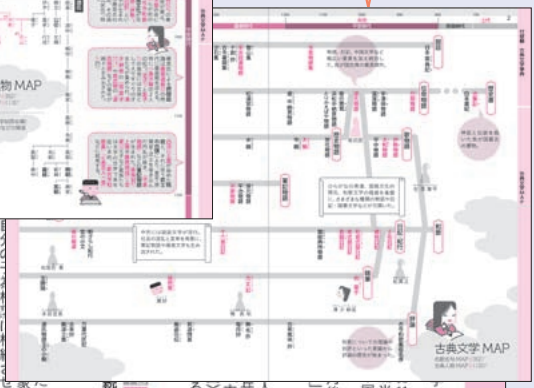
歌の背景や当時の文化がよくわかるミニコラムを全ページに掲載

特色 7

ひたすら暗記しても、なかなか身につかない「文学史」。MAPとアイコンで要点をつかむ「古典文学事典」

古典の全体像をつかむ、文学MAPと人物MAP





を「いき」と
11か国のひ
半島の北に
国との海上

人。1000 慶安
兵衛。別号、
古枯。らし
）⇩ 旬 408ページ
る。『東』日

この名
家の死後、
るために鎌

和泉（いずみ）地 旧63か国名で畿内から国のひとつ。**泉川**（いずみがわ）歌枕 京都府木津川市を流れる川。現在の木津川の一部。北流して淀川に合流する。多く「瓶（へい）」の原「鹿背山（かせやま）」とともに詠まれ、また、「いつ」の序詞に用いる。

▶名歌 ⇩ 百人一首 27

和泉式部（いずみしきぶ）

人 **平安朝随一の女流歌人。**情熱的・奔放な歌で天性の歌人といわれ、また美貌と数々の恋の遍歴で名高い。生没年未詳だが、平安時代中期の紫式部と同時代の人。学者の家柄の大江雅致（まさむね）の女。はじめ和泉守（いずみのかみ）橘道貞（たちばなのみちさだ）と結婚、小式部内侍（こしきぶのないし）を生んだ。のち冷泉（れいぜい）天皇の皇子為尊（ためたか）親王（しんのう）の恋人となり、その没後に弟皇子君の敦道（あつみち）親王（しんのう）と恋に落ちたが、その激しい恋愛は『和泉式部日記』に詳しく、同棲（どうせい）4年余りで亡くなった親王への挽歌（『続和泉式部集』）は絶唱。1009（寛弘6）年一条天皇の中宮彰子（しょうし）のもとに出仕し、のち丹後守藤原保昌（やすまさ）の妻となった。『拾遺和歌集』以下の勅撰集に346首入集。前記の『和泉式部日記』のほか家集『和泉式部集（正・続）』がある。中古三十六歌仙のひとり。

▶名歌 ⇩ 百人一首 56・歌 401ページ・中 401ページ・下

中古 中世 近世

日記

和泉式部日記（いずみしきぶにっき）

作品 日記。1巻。**敦道親王との10か月の恋愛を三人称で物語風につづった日記。**

作者 和泉式部といわれるが異説もある。

成立 1001（寛弘4）年ごろ。

冒頭 夢よりもはかなき世の中を、嘆きわびつつ明かし暮らすほどに、四月ばかりの十余日にもなりぬれば、木の下くらがりもてゆく。訳 夢よりもはかない今は亡き為尊親王とのことを、嘆きわず

らいながら日々を送るうちに、四月十日過ぎにもなってしまったので、（青葉が茂りあって）木の下が次第に暗くなってゆく。

▶解説 敦道親王は冷泉（れいぜい）天皇の皇子、兄に花山（かざん）天皇・為尊親王（ためたかしんのう）がいる。145首の贈答歌を中心に和歌的情緒に満ちた恋愛が展開される。

出雲（いずも）地 旧63か国名で山陰道8か国のひとつ。「雲州（うんしゅう）」とも。島根県東部。古代出雲神話の舞台となった。

出雲の阿国（おくに）

人 安土桃山時代の女性芸能者。生没年未詳。出雲大社の巫女といわれ、歌舞伎踊りを創始し、歌舞伎の始祖とされる。

伊勢（いせ）1 地 旧63か国名で東海道15か国のひとつ。「勢州（せいしゅう）」とも。三重県の大部分で志摩半島の北側。伊勢神宮がある。

伊勢（いせ）2

人 **平安時代前期の女流歌人。**生年未詳～939（天慶2）年ごろ。伊勢守藤原継蔭（つぐかげ）の女。「伊勢御（ごの）」とも。三十六歌仙のひとり。宇多天皇（うだてんのう）の温子（しょうし）に仕えた。温子の兄弟である時平（ときひら）との間に愛関係を持ち、また、宇多天皇との間に生まれたが、夫逝（ゆき）いた。のち式部卿敦慶（あつよし）親王（しんのう）を生む。勅撰集に184首入集。

▶名歌 ⇩ 百人一首 19・歌 395ページ・中

伊勢神宮（いせじんぐう）神仏 三重県伊勢市の皇大神宮（内宮）と豊受大神宮（外宮）の併称。内宮の祭神は天照大神（あまてらすおおかみ）の宗廟（そうびょう）の神器（じんぎ）のひとつ八咫鏡（やたのかがみ）をまつり、豊受大御神をまつる。皇女が斎（いつき）の宮（みや）とした。江戸時代には、広く日本各地に伊勢講（こう）と呼ばれる講集団が組織され、お伊勢参りを行った。

伊勢大輔（いせのたいふ）

人 平安時代中期の女流歌人。生没年未詳。1000（長保2）年ごろ。中宮彰子（しょうし）に仕えた。臣鎌足（おみかまたり）の孫、伊勢守（いせのかみ）の女。1013（長和2）年ごろ、一条天皇の中宮彰子に仕えた。1018（寛仁2）年ごろ、後拾遺和歌集（ごしゅういわかしゅう）に参加して活躍。『後拾遺和歌集』

辞典本文と同様、わかりやすいアイコン表示を随所に導入

＊使用している見本は完成前のものです。内容は一部変更になることがあります。